

篠山市

塚ノ山1号墳

篠山丹波線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書

平成21(2009)年3月

兵庫県教育委員会

篠山市

塚ノ山1号墳

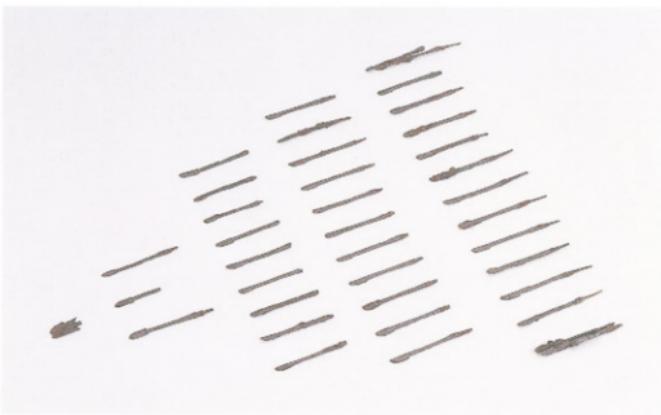
篠山丹波線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書



出土鐵器



大刀（M1）
鹿角裝塗大



出土鐵鎌

例　　言

1. 本書は篠山市に所在する塚ノ山1号墳および塚ノ山城跡の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査は篠山丹波線緊急地方道整備事業に伴い、兵庫県県土整備部篠山土木事務所の依頼を受けて、平成9年度に実施した。
3. 整理作業については兵庫県丹波県民局県土整備部篠山土木事務所の依頼を受けて、平成18~20年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所および兵庫県立考古博物館において実施した。
4. 遺物写真の撮影は、株式会社タニグチ・フォトと委託契約を交わして、兵庫県立考古博物館において実施した。
5. 本書の各遺構図面で使用している方位は座標北を示し、水準は東京湾平均水準（T.P.）を使用した。なお、座標値については、調査終了後、日本測地系から世界測地系への切り替えが行われたが、日本測地系のまま掲載している。
6. 本書で使用した地図は下記のとおりである。
第2図 周辺遺跡分布図 国土地理院発行1/25,000地形図「篠山」「福住」を1/2に縮小
7. 本書の執筆は、調査担当者である鐵英記と池田征弘が分担して行い、詳細は目次および本文該当部分に記している。編集は、垣本明美の補助を得て鐵が行った。
8. 調査・整理にあたっては下記の方々および機関のご協力・ご指導をいただいた。記して謝意を表します（順不同、敬省略）。

篠山市教育委員会

山本明彦 今井 敦 酒井元樹 日高 慎 中野卓郎
松岡千寿 堀山博史

凡　　例

遺構

本書での遺構名は遺構種類ごとに以下の略号を用いる。

S K : 土坑 S X : 経塚

遺物

土器　　土器の断面は、縄文土器・上師器は白抜き、須恵器は黒塗り、陶器は網掛けである。

石器　　他の遺物とは、番号の前にSをつけて区別している。

鉄製品　他の遺物とは、番号の前にMをつけて区別している。

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	p.1 (鐵 英記)
第1節 調査に至る経緯	
第2節 発掘調査の経過	
第3節 整理作業の経過	
第2章 遺跡の位置と環境	p.3 (鐵)
第1節 遺跡の位置	
第2節 歴史的環境	
第3章 調査の成果	p.7 (鐵・池田征弘)
第1節 縄文時代の遺構と遺物	
第2節 古墳時代の遺構と遺物	
第3節 中世の遺構と遺物	
第4章 まとめ	p.26 (鐵・池田)

抄録

卷首図版

出土鉄器／大刀（M1）鹿角装拵大／出土鉄鎌

挿図目次

第1図 遺跡の位置	p.3
第2図 周辺遺跡分布図	p.5
第3図 縄文時代の遺構と遺物	p.7
第4図 調査前測量図	p.9
第5図 調査区平面図 墳丘・堀切断面図	p.10
第6図 主体部平面図 遺物出土状況図	p.12
第7図 古墳時代の遺物	p.13
第8図 出土鉄器（1）	p.14
第9図 出土鉄器（2）	p.15
第10図 出土鉄器（3）	p.16

第11図 出土鉄器（4）	p.17
第12図 出土鉄器（5）	p.18
第13図 出土鉄器（6）	p.19
第14図 出土鉄器（7）	p.20
第15図 経塚（SX01）平面・断面図	p.21
第16図 中世以降の土器・陶器	p.22

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	p.5
第2表 出土遺物一覧表	p.24
第3表 出土鉄器一覧表	p.25
第4表 篠山市内の経塚	p.29

写真図版目次

- 写真図版1 調査前遠景（東上空から）／調査前全景（西から）
 ／経塚：SX01（西から）
- 写真図版2 墳丘遠景（東上空から）／墳丘全景（西から）
 ／主体部全景（東から）
- 写真図版3 主体部全景（北から）／大刀（M1）出土状況（南から）
 ／大刀（M2）出土状況（南から）
- 写真図版4 鉄鏃出土状況（南から）／堀切（北から）／SK01（西から）
- 写真図版5 出土遺物（縄文土器・石器・須恵器）
- 写真図版6 出土遺物（土師器）
- 写真図版7 出土遺物（須恵器・陶器）
- 写真図版8 出土遺物（大刀）
- 写真図版9 出土遺物（刀子）
- 写真図版10 出土遺物（鉄鏃1）
- 写真図版11 出土遺物（鉄鏃2）
- 写真図版12 出土遺物（鉄鏃3）

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

県内各地の道路整備事業の一環として、兵庫県土木部では各県道の整備が図られていた。兵庫県教育委員会は平成5年度に開発計画の調査を行い、兵庫県柏原土木事務所(当時)からの回答を受けて、一般県道篠山丹波線の平成6年度以降の工事計画部分について平成6年に詳細分布調査を実施した。その結果、事業計画地内に周知の埋蔵文化財包蔵地である塚ノ山1号墳が含まれることが判明した。そして、道路整備に伴い、墳丘が削平されることが明らかになったため、調査範囲確定のための確認調査を平成8年に、記録保存のための本発掘調査を平成9年に実施した。

第2節 発掘調査の経過

前節でも述べたとおり、分布調査を平成6年、確認調査を平成8年、本発掘調査は平成9年に実施した。調査の概要は以下のとおりである。

分布調査

調査番号 940063
調査担当者 渡辺 昇 池田征弘 松岡千寿
調査面積 約22,000m²
調査期間 平成6年4月14日

事業予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地である塚ノ山1号墳が存在することを確認し、同時に墳丘が改変されて城として利用された可能性が判明した。

確認調査

調査番号 960298
調査担当者 鈴木敬二
調査面積 8m²
調査期間 平成8年10月16日

墳丘と周溝の堆積状況を確認するためのトレンチを3箇所掘削した。その結果、墳丘規模が約23mであることことが判明した。

本発掘調査

調査番号 970341
調査担当者 鐘 英記 池田征弘
調査面積 482m²
調査期間 平成9年10月14日から12月2日

掘削前に航空測量を実施し、掘削はすべて人力によって行った。遺構検出後は、適宜実測と写真撮影を実施し、掘削後の航空測量を実施した。分布調査の所見のとおり、墳丘は後世に改変され城として利用されていた。古墳の主体部は木棺直葬で、鉄刀・刀子・鐵鏃といった鉄製品が多く副葬されていた。

出土遺物は現地で洗浄と台帳作成を実施した。ただし、鉄製品についてはかなり酸化が進んでおり、これ以上の劣化を防止するため、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所(当時)に持ち帰り、レントゲン写真の撮影を行って応急処置を施すとともに、台帳の作成を行った。

第3節 整理作業の経過

整理作業は丹波県民局農土整備部篠山土木事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所(平成18年度)および兵庫県立考古博物館(平成19・20年度)において平成18年度から平成20年度の3ヵ年にわたり実施した。

平成18年度

埋蔵文化財調査事務所において、金属器の保存処理を実施した。

整理担当職員

(金属処理) 岡本一秀 栗山美奈 大前篤子 藤井光代 清水幸子

報告書担当職員 鐵 英記 池田征弘

平成19年度

兵庫県立考古博物館において、遺物の実測、復元、写真撮影、報告書図版の作成を実施した。遺物の写真撮影は株式会社タニグチ・フォトに委託した。

整理担当職員 岸本一宏 真子ふさ恵 伊藤ミネ子 早川有紀 萩野麻衣

谷脇里奈 的場美幸 八木和子 垣本明美

報告書担当職員 鐵 英記 池田征弘

平成20年度

引き続き報告書図版の作成を行うとともに、報告書の執筆、編集、印刷を行った。

整理担当職員 岡田章一 垣本明美

報告書担当職員 鐵 英記 池田征弘

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

塚ノ山1号墳が所在する兵庫県篠山市は、兵庫県の内陸部中央東端に位置し、旧多紀郡の篠山町、丹南町、西紀町、今田町が平成11年の合併により誕生したものである。市域の面積は約377km²で、北は兵庫県丹波市、西は兵庫県加東市、南は兵庫県三田市、東は京都府と接している。篠山市が位置する篠山盆地は、中央部における標高が約210mで、東西約12km、南北約2kmを測る。周囲を標高600mから700m級の三岳、小金ヶ嶽、八ヶ尾山、雨石山、櫃ヶ嶽、三国岳、弥十郎岳、愛宕山、虚空藏山、白髮岳、金山、黒頭峰等の山々が取り囲み、三国岳に源を発する篠山川が盆地中央を東西に流れ、丹波市山南町で加古川に流入する。

塚ノ山1号墳は盆地の東部、篠山川右岸に向かって突出した丘陵の南先端に位置し、標高は約227mである。



第1図 遺跡の位置

第2節 歴史的環境

塚ノ山1号墳(1)周辺の歴史的環境を遺跡の位置する旧篠山町域を中心に概観してみたい。現在、篠山市において確認されている最古の遺跡は、旧西紀町に所在する板井・寺ヶ谷遺跡で、後期旧石器時代の集落が確認されている。旧篠山町域においては藤岡山遺跡(9)で旧石器時代末の木葉形尖頭器をはじめとする石器群が確認されているほか、同時期の尖頭器が数箇所で採集されており、旧石器時代後半には人々の営みが始まっていたと考えられる。

縄文時代の遺跡はこれまで調査例が少なく、確認されている遺跡が縄文時代後期以降のものであることから、旧石器時代から縄文時代前半にかけての時期は当地域においては安定的な集落は數少なかったものと思われる。後期以降になると先述の藤岡山遺跡や下笠見遺跡で土器や石器が出土し、定住的な集落が存在していたと考えられる。また、塚ノ山1号墳の下層でも縄文時代晩期の遺構が見つかっており、縄文時代晩期には低地部と丘陵部の双方で集落が営まれていたと思われる。

縄文時代晩期にいくつか遺跡が確認されているが、今までのところ弥生時代前期の遺跡は見つかっていない。篠山川の北岸では、これまでに触れた藤岡山遺跡で中期の方形周溝墓群が見つかり、車塚の坪遺跡でも土坑墓群が検出され、鉄砲山遺跡(15)では後期の墳丘墓が認められる。篠山川南岸においては詳細は不明ながら市内最大の弥生時代集落と目される谷山遺跡(34)も出現する。

古墳時代にはいると国内各地で、政治性を帯びた墓として古墳が作られるようになる。篠山市においても市内各所で古墳が営まるようになる。このうち、前期に築造されたものとしては直径30mの円墳である飯塚古墳、全長45mの前方後円墳であるポン山古墳、小規模な竪穴式石室と土器棺を主体部に持

つ前山19号墳(45)等があげられる。

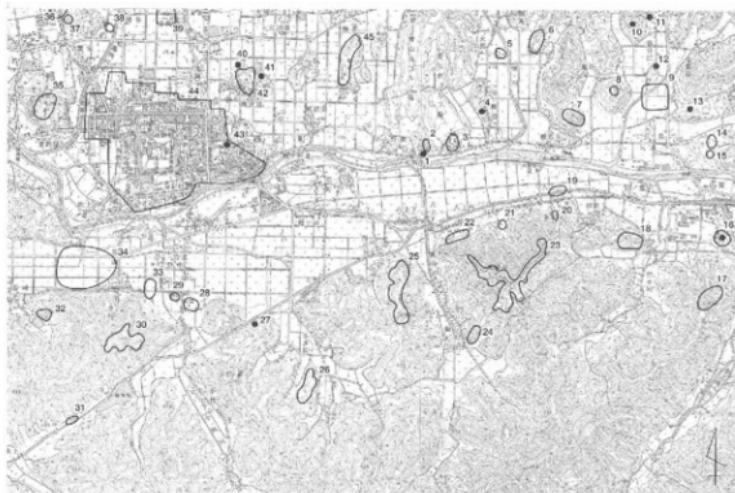
中期に入ると盆地東部で全長140mと卓越した前方後円墳である雲部車塚古墳が築造される。雲部車塚は明治期に後円部の竪穴式石室が発掘され、長持形石棺が納められていたことが判明している。車塚古墳の周りは、京都丹波地方から後の山陰道に沿ったかたちで続く大型方墳の分布域に含まれ、姫塚古墳、北条古墳が営まれる。盆地西側では直径56mの大型円墳である新宮古墳も築造されている。未調査のため、所属時期は不明ながら、これらの大型方墳や大型円墳以外にも沢田八幡5号墳(40)、池ノ山古墳(41)、全長70mのよし池山上古墳(13)といった前方後円墳も築造されている。

後期に入ると、主体部に横穴式石室を採用する古墳が出現する。後期前半には前方後円墳も残存するが、後期後半以降は円墳が中心となる。また、巨石を用いた横穴式石室を持つ独立墳が各所に営まれるようになる。なかでも、曾地・洞中1号墳は丹波地方でも最大級の横穴式石室を持つもので、隣接して横穴式古墳を主体部とする前方後円墳である岱塚・洞中2号墳も築造されている。これらの大型墳とは別に、中期後半以降盆地を囲む丘陵には群集墳が築造されている。これらの群集墳には今回調査した塚ノ山1号墳のように木棺直葬墳と考えられるものと、小型の横穴式石室を主体部とする古墳群も認められる。また、真南条上古墳群(31)のように、木棺直葬墳と石室を持つ古墳が混在する場合もある。群集墳の調査例は少ないものの、真南条上3号墳では木棺直葬で複数の主体部を持ち、鉄器・玉類が副葬されていた。

このように、古墳についてはある程度の知見が得られているが、同時期の集落については不明な点が多い。古墳時代前期の旧河道から多彩な木製品が出土した荻池北遺跡、前期の住居が検出された寺内遺跡(39)、後期の住居が検出された大芋中ユリ遺跡などが数少ない調査例である。

古代に入ると、律令国家の地方支配の基盤として各地で交通路と役所の整備が行われる。篠山においても官道である古代山陰道が市域を横切り、古代多紀郡の中心として郡衙が置かれたと考えられる。東浜谷遺跡(36)では「郡」という刻印を持つ須恵器、「尉」と墨書きされた須恵器や円面鏡・軒用鏡をはじめとして奈良時代の遺物が大量に出土している。隣接地に「郡家」という字名が残る点からも多紀郡衙の有力な比定地であるが、明確な遺構は見つかっていない。また、古代山陰道の駅場である小野駅と長柄駅についても明確な遺構は見つかっていないが、それぞれの比定地に近接した二ノ坪遺跡や西浜谷下小西ノ坪遺跡では古代の遺物が出土している。奈良時代の寺院跡と考えられる遺跡には、蓮華文軒丸瓦・唐草文軒平瓦などが大量に出土した寺内遺跡や寺内遺跡と同種の軒丸・軒平瓦のほか重圓文軒丸瓦が出土し、多数の遺構が検出されてる竈円寺遺跡(33)があり、竈円寺遺跡で出土した瓦を焼成したと考えられる王地瓦窯(27)も調査されている。

中世は土地経営制度の変化や文化面での変革と政治的な混乱があった時代で、その影響は篠山においても認められる。平安時代以降、篠山地域においても荘園の経営が始まる。東寺領大山莊をはじめとして、歎喜光院領からちに宇多院領となる多紀莊、近衛家領官田莊など、各所に莊園が成立している。ただ、文献史料に認められる莊園の実態を現すような中世集落については、調査例が未だ充分とはいえない。篠山盆地内で当時の集落遺跡と考えられるものには、青山台西遺跡、八上上遺跡(19)、寺内付田の坪遺跡、郡家宮東の坪遺跡(38)、岩崎遺跡などが挙げられる。これらの遺跡からは土器の出土や溝等の検出が報告されているものの、集落の様相を明らかにできるだけの情報は得られていない。また、当時の墓地については、泉中世墓群(14)、寺内上藤の木遺跡、東仙寺寺谷中世墓などがあり、集石、石積墓壇、石塔といった上部施設を持ち、藏骨器として丹波焼を用いる例が知られている。



第2図 周辺遺跡分布図

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	塚ノ山1号墳・塚ノ山城跡	古墳時代、中世	24	廻丸城跡	中世
2	塚ノ山古墳群	古墳時代	25	法光寺城跡	中世
3	鹿山城跡	中世	26	小谷城跡	中世
4	屋中3号墳	古墳時代	27	王丸1・2号瓦窯	古代
5	大瀬城跡	中世	28	城南小学校内遺跡	弥生時代～古墳時代
6	大上西ノ山城跡	中世	29	小丸山岩跡	中世
7	猿若寺城跡	中世	30	谷山城跡	中世
8	圓田山城跡	中世	31	真鍋条上古墳群	古墳時代
9	藤岡山遺跡	旧石器時代、縄文時代、 弥生時代、古墳時代、古代	32	岩崎城跡	中世
10	長吉古墳	古墳時代	33	蓑円寺遺跡	古代
11	霞音古墳	古墳時代	34	谷川遺跡	弥生時代
12	藤岡山5号墳	古墳時代	35	飛の山城跡	中世
13	よし池山上古墳	古墳時代	36	東浜谷遺跡	古墳時代、古代
14	泉中世墓群	中世	37	新井鉢跡	中世
15	鉄砲山遺跡	弥生時代	38	郡家宮東の坪遺跡	古代、中世
16	堂山古墳・堂山城跡	古墳時代、中世	39	寺内遺跡	弥生時代～中世
17	曾連城跡	中世	40	沢田八幡5号墳	古墳時代
18	安明寺城跡	中世	41	池ノ山古墳	古墳時代
19	八上上遺跡	中世	42	沢田城跡	中世
20	八上・東陽寺跡	中世	43	土丸山陶器所跡	近世
21	誓願寺跡	中世	44	鏡山城・鶴山城下町	近世
22	八上城主居屋敷	中世	45	前山古墳群	古墳時代
23	八上城跡	中世～近世			

第1表 周辺遺跡一覧表

当時の信仰のあり方を伝えるものとして、篠山盆地の北方に広がる多紀連山では山岳を中心として山岳仏教遺跡が分布している。東は小原、葭見地区から西は旧西紀町栗柄地区にかけて、山中の南斜面を中心に寺院跡が見られる。

修験道場の中心と伝えられている大岳寺跡は三岳南方尾根に立地し、本堂などの遺構が確認され、周辺に複数の堂宇が存在することが判明している。小金ヶ岳の南方山頂付近に立地する宝塔山福泉寺跡でも中心伽藍が遺存しており、土師器、瓦器、丹波焼、瀬戸・美濃焼等の陶片が確認されている。これらの山岳道場は15世紀末に大峯衆徒との争いで全山消失廃絶したと伝えられ、山麓の宿坊群も含めて現在に至るまで再興されていない。また、修験道場以外にも、誓願寺跡(21)や八上・東陽寺跡(20)などのように中世までさかのぼる寺跡が存在している。

また、政治的動乱や地域支配の遺構として、篠山盆地周辺には中世城館が数多く分布している。なかでも、中世段階に篠山を支配した波多野氏が拠点とした八上城(23)やその周辺の諸城をはじめ、篠山川右岸の丘陵や平地にも数多くの山城や居館が認められる。これらの山城は既して小規模で単純な柵張りのものが多い。また、中世段階の居館としては県史跡の大潤館跡(5)が周囲の土塁・堀が完存しており、当時の様子を伝えている。波多野氏段階の八上城は、殿町周辺に城主の居館があり、谷奥川流域に城下が広がったとされる。また、薦丸城(24)、法光寺城(25)を配して、城下の防衛を図っている。こうした波多野氏段階での諸城とは別に、明智光秀による八上城包囲戦時の陣城がある。うち、般若寺城(7)、勝山城(3)、塚ノ山城が篠山川の右岸に残っている。波多野氏滅亡後も松平康重に至るまで八上城は使われており、前田玄以が城主であった時代に主膳屋敷(22)や城北側の春日神社付近に城下町が移ったとされる。

江戸時代初頭、松平康重の時代に天下普請で篠山城(44)が築城される。篠山城の関連では、二の丸大書院や城下町の調査が多く行われ、藩窓ともいいくべき王地山陶器所跡(43)の調査も行われている。調査と平行して、史跡整備も行われ、平成12年には大書院が復元され、その後も石垣や町並みの整備が続けられている。

【参考文献】

- 兵庫県教育委員会「兵庫県の中世城館・莊園遺跡」(1982)
兵庫県教育委員会「丹波平地瓦窯」(1984)
兵庫県教育委員会「真南条上3号墳」(1995)
兵庫県教育委員会「八上上遺跡」(2003)
兵庫県教育委員会「篠山城旧三の丸跡」(2006)
篠山町教育委員会「篠山町内遺跡詳細分布調査報告書」(1989)
篠山市教育委員会「八上城・法光寺跡調査報告書」(2001)
西紀・丹南町教育委員会「丹南町内遺跡分布図」(1993)

第3章 調査の成果

今回の調査では縄文時代、古墳時代、中世の遺構と遺物を検出した。ここではその成果を時代順に述べることとする。

第1節 縄文時代の遺構と遺物

1) 遺構

墳丘の盛土をはずし、主体部の底面とはほぼ同じレベルで土坑(SK01)を1基検出した。

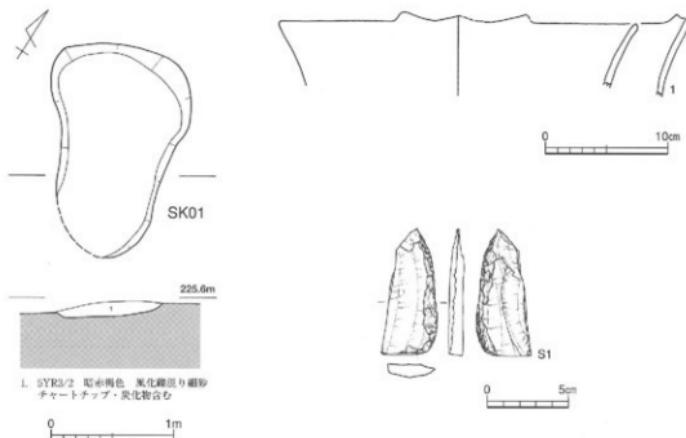
SK01 (第3図:写真図版4)

やや歪な指円形を呈する土坑で、最大幅1.1m、長軸1.8m、検出面からの深さ12cmを測る。基盤層である礫混じり層を少し掘り込んでいる。埋土は暗赤褐色の風化裸が混じる細砂で、埋土中には炭化物およびチャートのチップが混じっていた。縄文土器の深鉢(1)が出土している。

2) 遺物 (第3図:写真図版5)

1はSK01から出土した縄文土器の深鉢の口縁である。大きく開く波状口縁で、全体に摩滅しているが器面調整は貝殻条痕であったと思われる。縄文晩期前半に属するものである。

S1はサスカイト製のスクレイパーである。土坑を検出した面とはほぼ同じレベルで古墳主体部掘方から出土した。側縁に丁寧な調整を施すとともに、先端部は両側縁を加工する。



第3図 縄文時代の遺構と遺物

第2節 古墳時代の遺構と遺物

ここでは塚ノ山1号墳の墳丘・主体部と出土遺物について述べることとする。

1) 遺構

a. 墳丘（第4・5図：写真図版2）

当初、掘削前の測量を行った時点では、本墳は丘尾を切断し、標高224m付近が墳帽になる直径20m強のやや重な円墳と考えていた。

調査の結果、東側の丘尾切断部分は古墳築造時のままでなく、塚ノ山城築城の際に堀切として再掘削された可能性が高い。

墳丘は現状で約15mの盛土を行っていた。盛土には基盤層に見られる赤色縞を含んでおり、築造時に尾根を切った際の掘削土を利用したものと考える。ただし、東西断面のにぶい橙色縞（3層）、南北断面のにぶい橙色縞（11層）、褐灰色シルト質極細砂（19層）については堆積状況や中世の遺物を含む点から考えて、城構築時に積みなおされた可能性もある。そのため、墳丘の直径は基盤層整形部分も含めて約17m程度になると考えられる。

b. 主体部（第6図：写真図版2・3）

主体部は墳丘の中心よりもやや西にいた部分で検出した。盛土上面で認識できず、主体部掘方および木棺痕跡とも底面レベルに至ってはじめて確認できた。そのため、当初の深度については推測が困難である。掘方は長辺が約5.0m、短辺が約2.8mを測る長方形を呈し、長軸が東西方向に置く。主体部である木棺の痕跡は、掘方に對して若干角度を持つが、長軸を東西方向に置き、長辺3.8m以上、短辺約0.8mで、木棺の内法を示していると思われる。

c. 遺物出土状況（第6図：写真図版3・4）

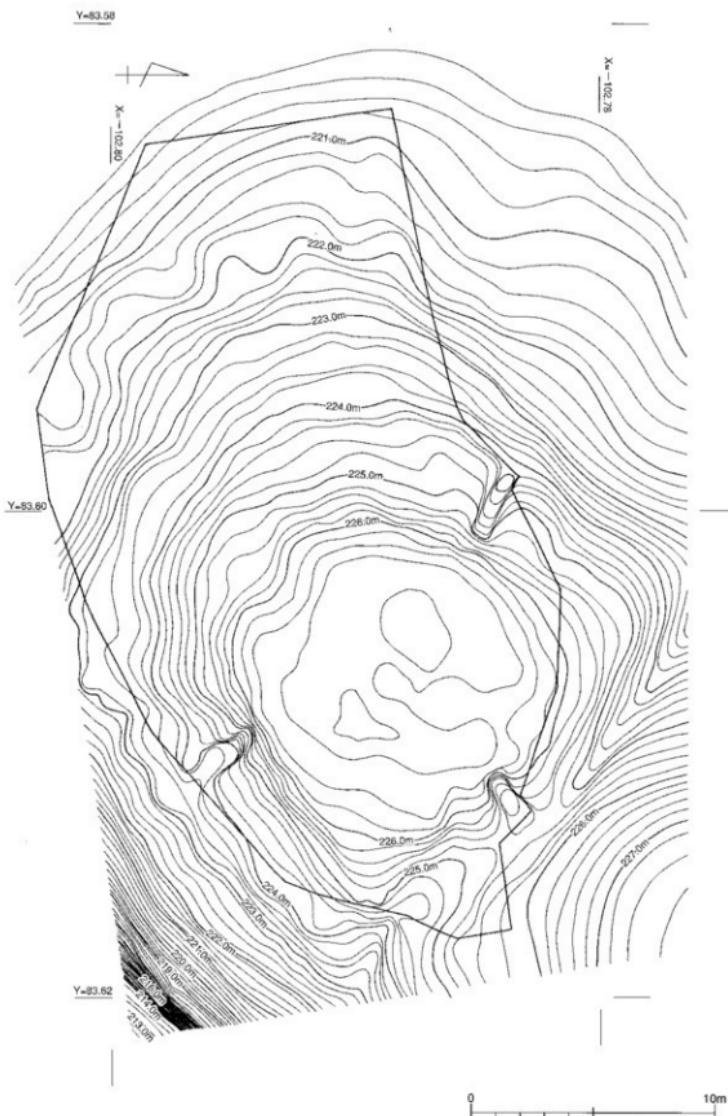
古墳時代の遺物は土器類と鉄器類である。このうち、土器類では須恵器と土師器がある。これらは墳丘裾や墳丘西側斜面の表土層から出土しており、原位置はとどめていない。また、細片で残存率の悪いものがほとんどを占めていることから、本来古墳に副葬されていたものが、後世の活動により擾乱・散布されたものと考えられる。

鉄器類はすべて主体部からの出土である。大刀2振、刀子3本、鉄錆約50点がおおむね木棺痕跡の南側辺に添う形で出土している。なお、鉄錆の点数は錆身の数に基づいている。また、形式の記述に関しては、尾上元規氏の分類⁽⁶⁾に準拠する。

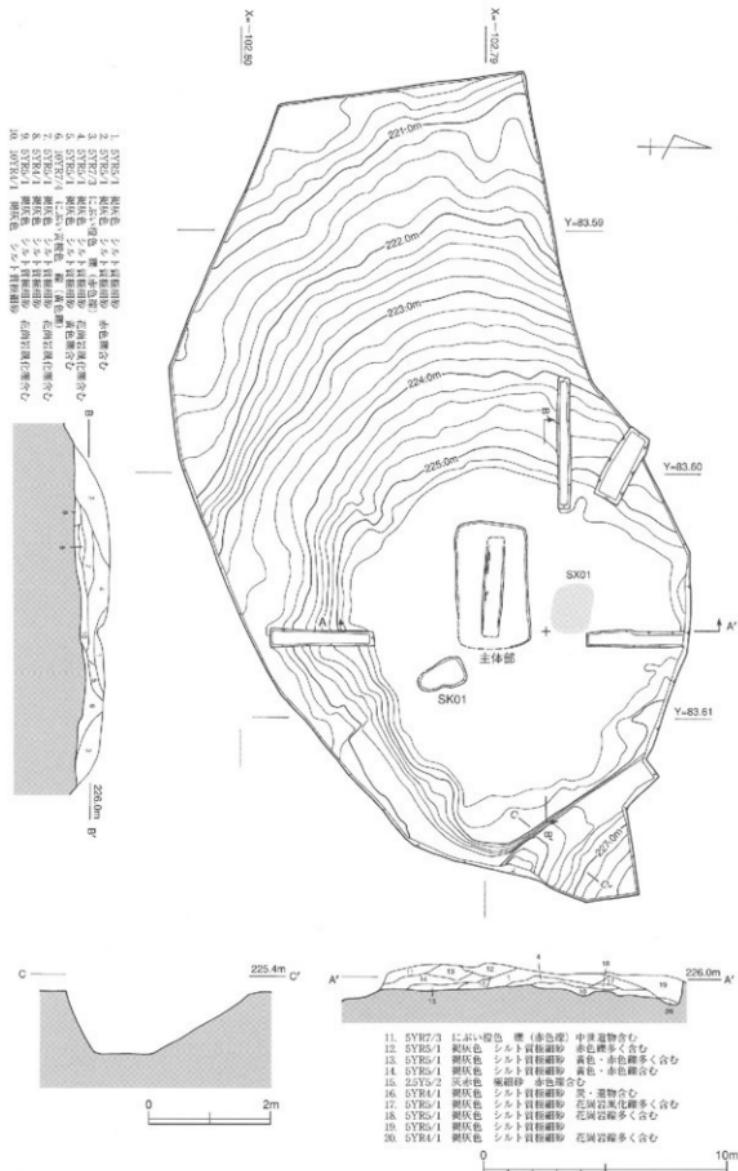
大刀2振は木棺痕跡の長軸方向の両端で出土している。東端の大刀（M1）は鹿角装で、背を南側（棺外側）に向か、切っ先を西に向けて置かれていた。その中央下には大刀と直交する形で鹿角装刀子が置かれていた。また、切っ先の西側に少し離れて、鹿角装刀子がもう1本出土した。

西端にはもう1振の大刀（M2）が置かれていた。この大刀は刀装具の残存状況が悪いが、鹿角装である可能性が高い。背を北側（棺内側）に向か、切っ先を東側に向けており、東側の大刀と切っ先が向き合うようなかたちで副葬されていた。

また、この大刀の周囲では鉄錆が5点検出されている。その内訳は有茎平根式錆1点と長頸錆4点で、



第4図 調査前測量図



第5図 調査区平面図 塗丘・堀切断面図

長頸鎌は脇抜柳葉式3点と片刃箭式1点からなる。なかでも、有茎平根式鎌は大刀の下から重なるように出土している。

木棺痕跡の中央付近には鉄鎌40点あまりがまとめて置かれ、そこより少し西側で刀子1本と鉄鎌1点を検出した。鉄鎌群と大刀(M1)との間隔は50cm足らずで、これが矢柄の長さに当たるものと考える。鉄鎌は当初の埋納状態からみればやや乱れていると思われるが、先端を西に向かって、10点程度が1単位で納められていたと考えている。また、布状の有機物が鋸びた部分に接着しているものが多く、布で巻かれていたか、布製の袋に収めた状態で副葬された可能性がある。なお、この部分で出土した鉄鎌はすべて長頸片刃箭式で占められている。

2) 遺 物

a. 土器類（第7図：写真図版5）

須恵器と土師器が出土している。出土状況の項で述べたように、主体部から出土したものではなく、ほとんどが表土からの出土である。

2から4は須恵器壺蓋である。いずれも残存率が1/6程度であるが、復元された口径は9.9cm～11.85cmで、器高が3.3cm～4.5cmとなっている。天井部の2/3をヘラケズリし、天井部と口縁部の境界にはいずれも明確な段を持つ。口縁部の立ち上がりもほぼ垂直で、口縁端部にはいずれも内傾する段が認められる。

5から7は須恵器壺身である。残存状況が悪く、口縁部から底部まで繋げて図示できるものはなかった。いずれも底部外面2/3程度に回転ヘラケズリを施す。受け部での直径は復元値で14.4cm～15cmを測る。5は底部を欠くが、受け部は水平に張りだし、立ち上がり部が外反して伸びる。口縁端部は丸く取れる。6は口縁部を欠き、やや扁平な体部を持つ。受け部の張り出しは少し弱く、立ち上がり部は外反するようである。7は深い体部を持ち、受け部の張り出しも明瞭である。この個体に関しては、接合点がないため図示はしていないが、同一個体と思われる直線的に伸びる口縁部の破片があり、口縁端部は少し厚みを増し、内傾している。

8は須恵器の壺口縁部である。大きく開く口縁部を持ち、口縁端部を肥厚させる。

9は甕である。扁平な球形の体部をもつ。肩部と腹部の間に沈線で区画を作り、そこに鶴状工具による連続刺突文を充填する。

10は壺の頸部と思われ、細かい波状文を施している。

11・12は土師器である。11は甕の破片で、外反する口縁部である。12は丸みを帯びた扁平な球形の体部を持つ無頸甕である。

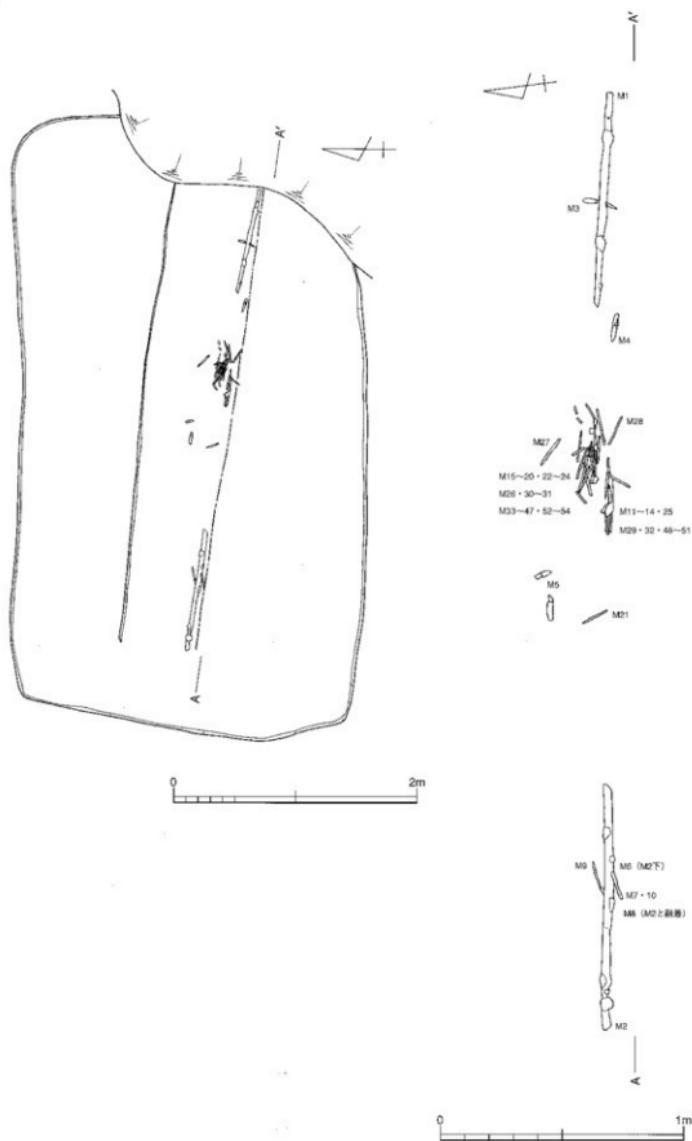
これらの土器のうち、時期変遷のとらえやすい壺身・壺蓋については、壺蓋に比べて壺身が形態的に新しくなる要素があると思われるため、全体として田辺縦年(?)のMT15型式～TK10型式に相当するものと考え、実年代としては6世紀前葉(?)を中心とする時期のものとしておく。

b. 鉄器類

出土している鉄器は、鉄製武器のみで、大刀2振、刀子3本、鉄鎌49点である。

大刀（第8・9図：写真図版8）

M1・M2は大刀である。M1は全長87.4cmの直刀で、刃部は70.4cm、幅2.6～2.8cmを測り、断面形は背幅が0.85～0.9cmの三角形を呈する。鋒部分が僅かに欠損している。柄部は柄縁も含めた長さが17cm、



第6図 主体部平面図 遺物出土状況図

最大幅2.5cm、木質も含めた厚さが1.35cmで、柄頭の外装は欠損していると思われる。鞘口と柄縁には鹿角装が残存しており、特に柄縁では部分的ではあるが直弧文が残存し、赤色顔料の付着が観察される。直弧文は半載AB連結形⁴⁶ではないかと思われる。刃部を覆うように鞘の木質が遺存しているが、鞘口の鹿角装の部分には、約9mmの幅で木質がない部分が観察される。柄部には2カ所の目釘穴があり、その間隔は6.3cmとなっている。茎部は断面形が長方形を呈し、柄木に差し込まれている。柄木には巻き紐の痕跡が認められ、断面の観察によれば、二本の繊維束の周りを別の繊維が取り巻いて一本の紐を構成している。

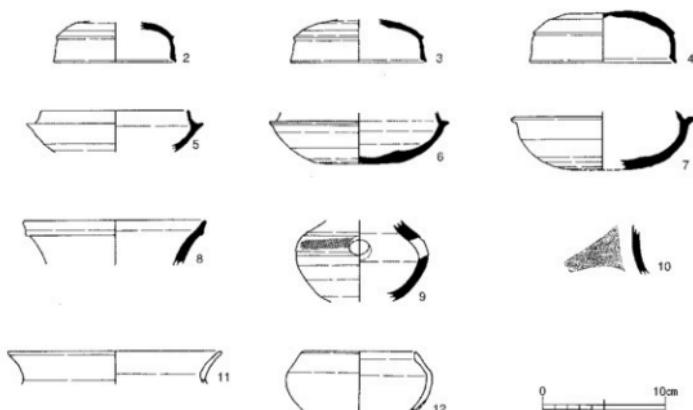
M2は全長99.5cmの直刀で、刃部は81.1cm、幅3.6~4.0cmを測り、断面形は背幅が1.3cmの三角形を呈し、M1と比較すれば一回り大きな造りとなっている。柄縁も含めた柄部は長さ18.4cmで、最大幅が2.3cm、残存する厚みは1.4cmである。柄縁と鞘口の外装はほとんど失われているが、柄縁の一部に鹿角装が残存している。刃部は全体に鞘の木質で覆われている。柄部には目釘穴が3カ所あり、その間隔は5cmと5.5cmで柄頭側が若干広くなっている。茎部は断面形が三角形を呈し、背部の幅が0.9cm、幅2.0cmである。M1と同様、柄木には巻き紐の痕跡が認められ、紐の構造も同じである。

刀子（第9図：写真図版9）

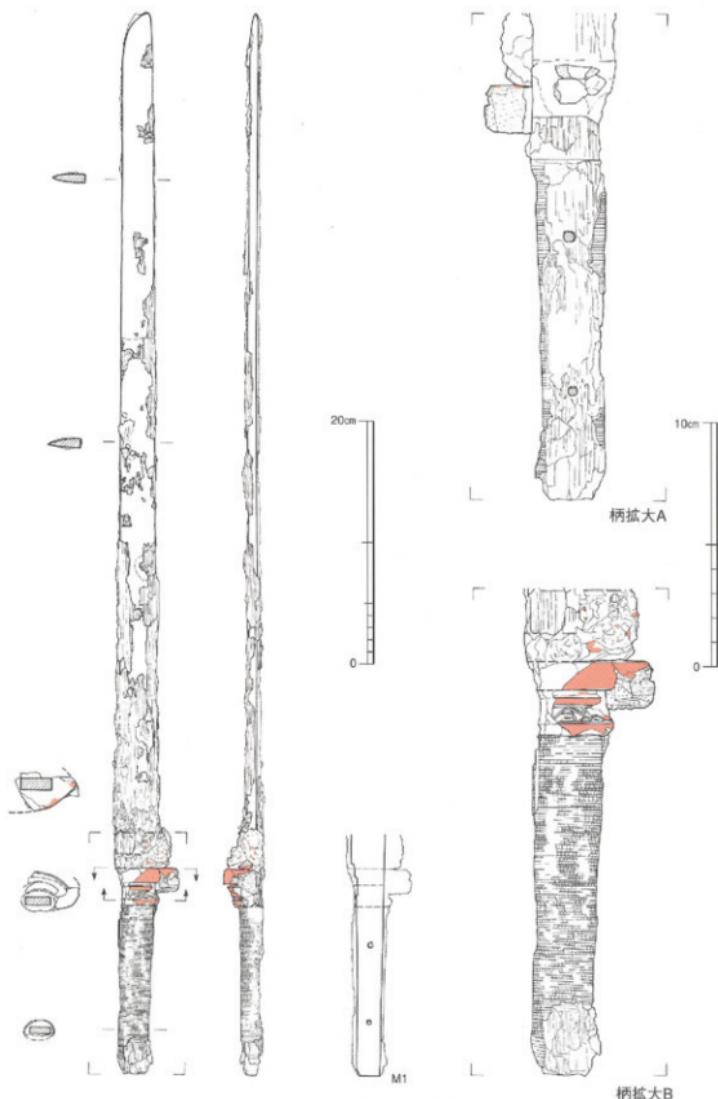
M3~M5は刀子である。M3は全長15.1cmで、刃部は6.8cmを測る。刃部の断面は三角形で、厚さは0.3cmである。柄部は長さ5.2cm、最大幅2.2cmで、茎を木質で包んだ上で、外装には鹿角装を用いている。茎は長さが5.15cm、厚さ0.4cmを測り、断面形は四角形で端部が尖る。

M4は現状で全長10.8cm、刃部は先端を欠き6.4cmを測る。刃部の断面は三角形で、厚さは0.55cmである。柄部は長さ4.5cm、最大幅1.95cmで、茎を木質で包んだ上で、外装には鹿角装を用いている。茎は長さが4.4cm、厚さ0.4cmを測り、断面形は四角形で端部は欠損していると思われる。

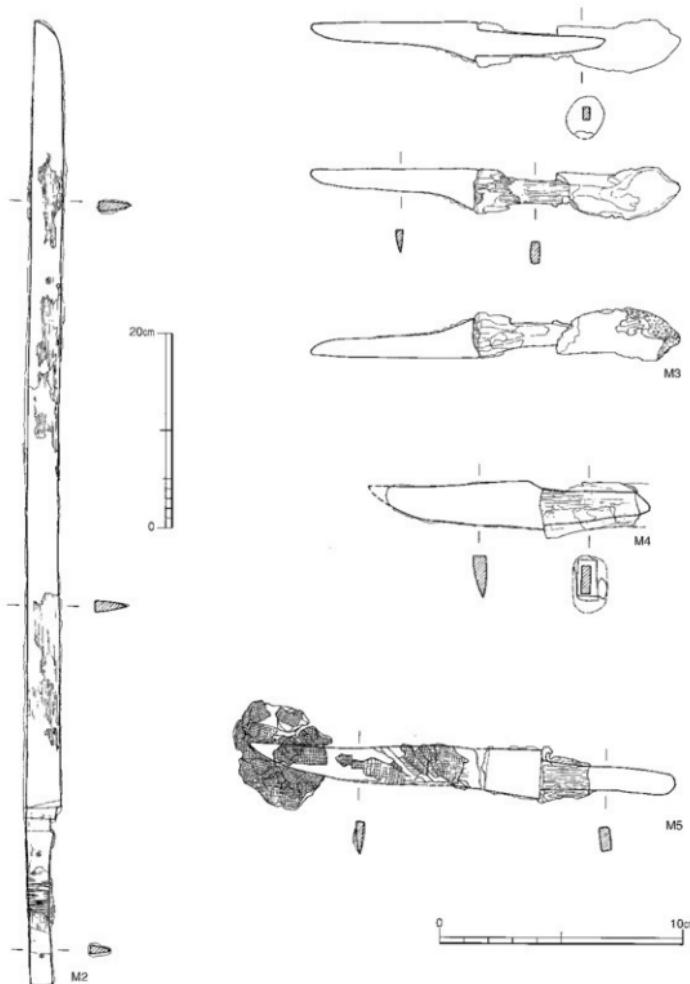
M5は現状で全長18.05cm、刃部は先端を欠き12.0cmを測る。刃部の断面は三角形で、厚さは0.5cmである。平織の布が刃部全体に付着していた。柄部は長さ5.45cm、最大幅2.3cmで、茎を木質で包んでいる。



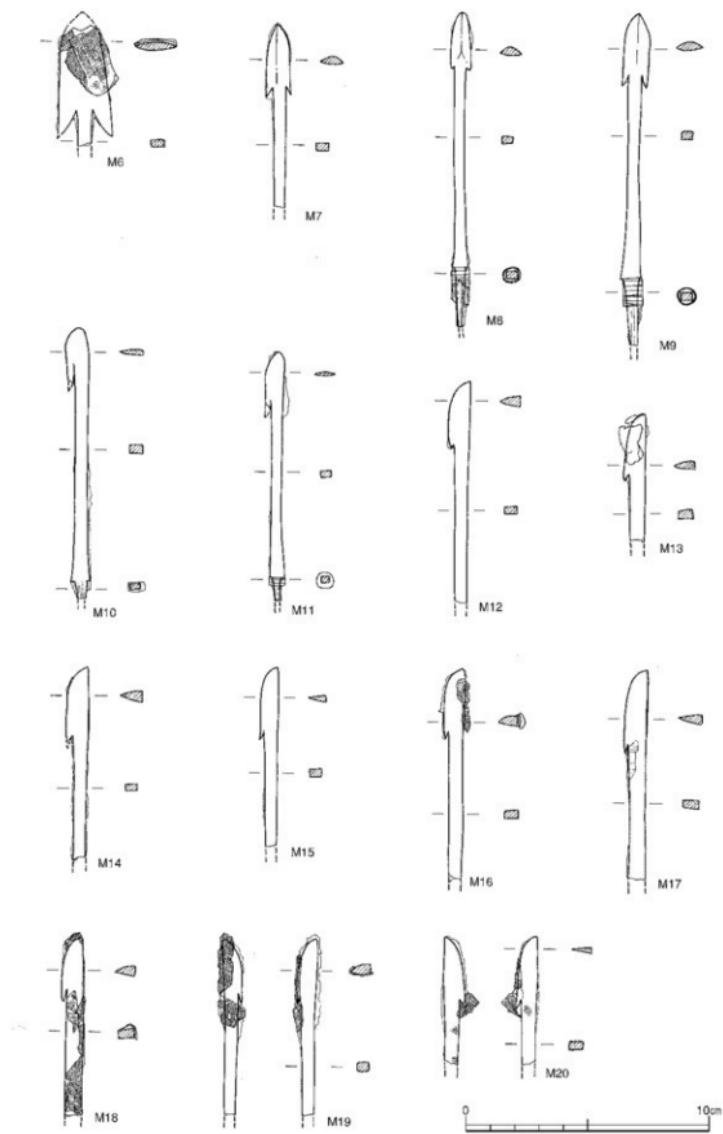
第7図 古墳時代の遺物



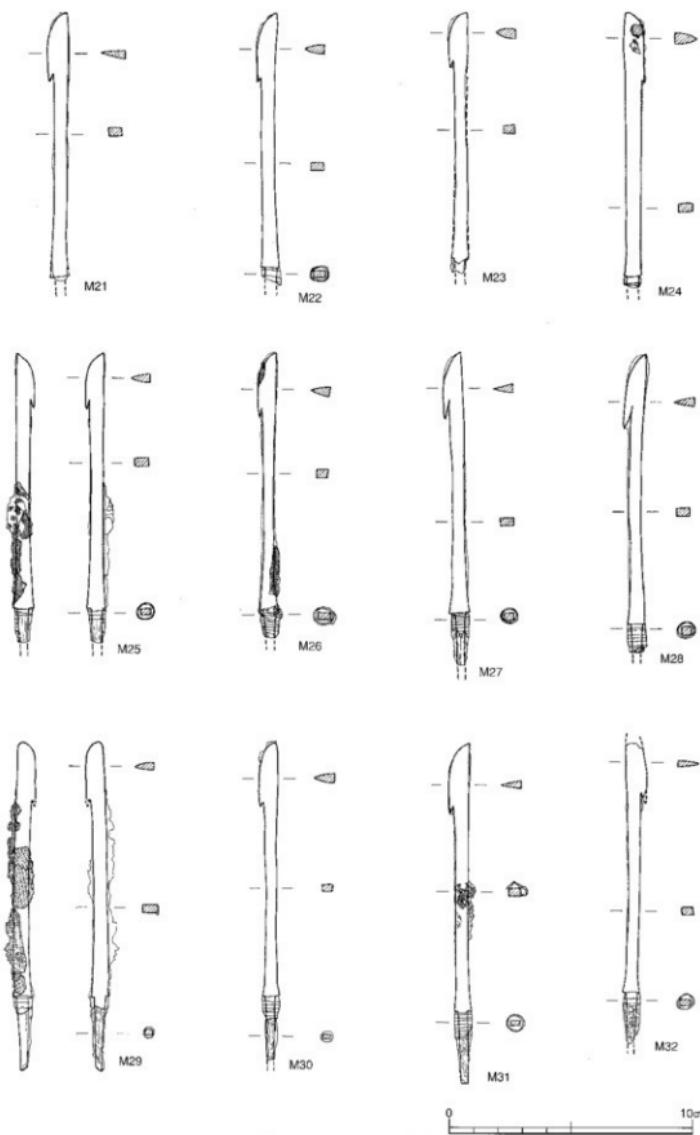
第8図 出土鉄器（1）



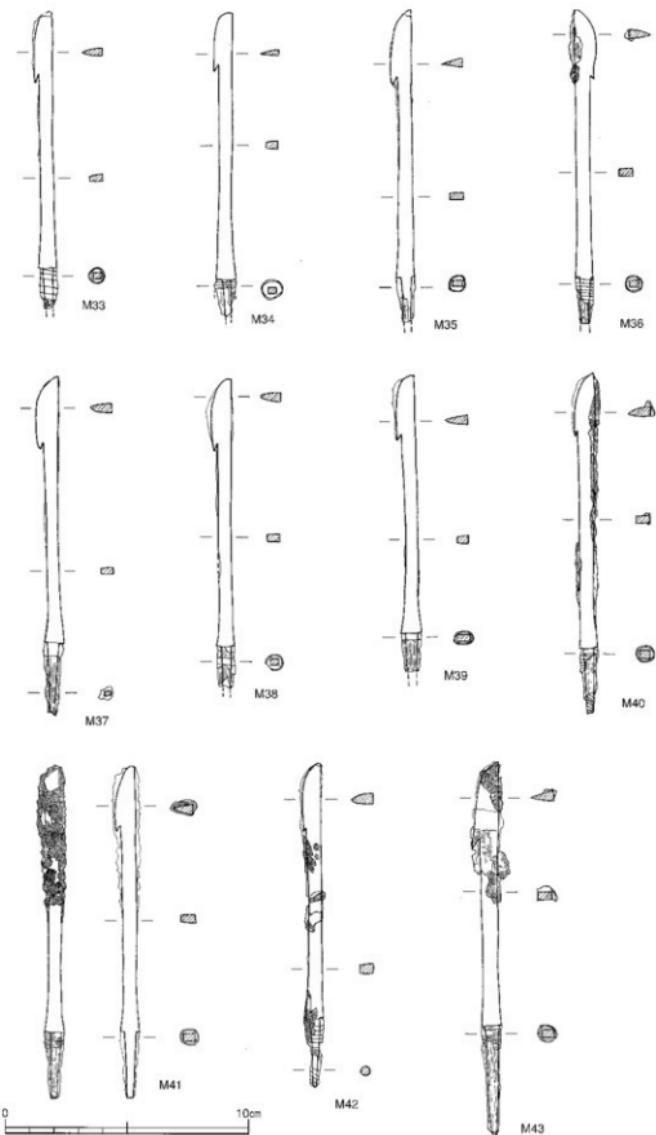
第9図 出土鉄器（2）



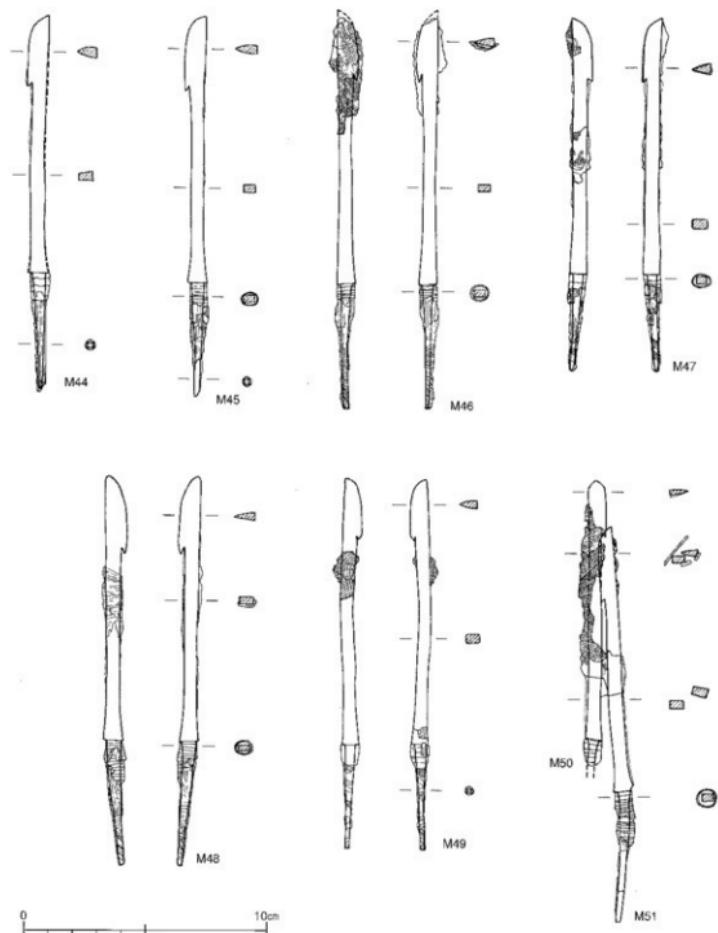
第11図 出土鉄器（3）



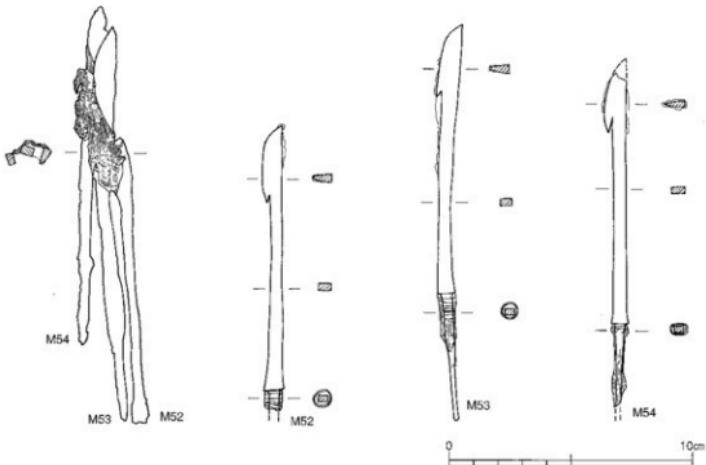
第11図 出土鉄器 (4)



第12図 出土鉄器(5)



第13図 出土鉄器（6）



第14図 出土鉄器(7)

茎は長さが5.45cm、厚さ5.5cmを測り、断面形は四角形で先端は丸くなっている。

鉄鎌 (第10~14図 : 写真図版10~12)

今回出土した鉄鎌は上述のように49点であり、複数の形態が認められる。総部の呼称については杉山氏の整理⁽⁶⁾に準拠している。

M6は有茎平根式の脇抜柳葉式鎌で、先端と茎部を欠損する。鎌身部の長さは現状で4.6cm、最大幅は1.75cm、断面形は両丸造で厚さが0.3cmを測る。鎌身関部の逆刺は深く鋭角である。頭部の長さは現状1.5cm、断面は長方形で、幅0.65cm、厚さ0.35cmである。平織の布が付着している。

M7~M9は長頭式の脇抜柳葉式鎌である。残りのよいもので全長が12.85cmを測る。鎌身長は2.35~3.0cm、鎌身幅0.9~1.2cm、厚さ0.3cmの片丸造である。鎌身に錆があり、鎌身関部は鋭角の逆刺となっている。頭部は長さ8.3cm、厚さ0.3~0.35cmで、断面は長方形である。頭部と茎部の境界は台形闊となる。茎部には矢柄の木質とそれを固定する樹皮状の繊維が残るものがある。

M10~M54は長頭式の片刃箭式鎌である。全長は14.5~16.25cmを測り、鎌身長が2.2~3.7cm、鎌身幅0.9~1.1cm、厚さ0.2~0.4cmの平片刃造である。鎌身関部は鋭角の逆刺となっている。頭部の長さは7.7~8.55cm、厚さ0.3~0.4cmで、断面は長方形である。頭部と茎部の境界は台形闊となる。茎部は長さが3.9~5.3cmで、断面形は正方形から長方形である。茎部には矢柄の木質とそれを固定する樹皮状の繊維が残るものが多くあり、鎌身から頭部にかけて平織の布が付着するものが多い。錯びているため明確ではないが、逆刺の形態や深さに変異があり、製作工人の違いを表している可能性が考えられるが、全体としては規格化された一群である。

(鐵 英記)

第3節 中世の遺構と遺物

前節でも少し触れたが、塚ノ山1号墳の墳丘は、後世において大きく改変されて、再利用されている。墳丘をはずしていく過程で、経塚ではないかと考えられる土坑(SX01)や塚ノ山城の施設と考えられる堀切を検出した。

1) 遺構

経塚: SX01 (第15図: 写真図版1)

墳丘を外していく過程で、墳丘のほぼ中央で検出した。南北1.76m、東西1.88m、残存する深さが0.74mの隅丸方形の土坑で、中央北側には30cm大の扁平な石材も検出された。土師器製経筒などの破片が出土していることから、後世に攪乱されているものの経塚であった可能性が高い。

堀切 (第5図: 写真図版4)

墳丘の東側で約7mにわたって、直線的に丘尾が切断される部分が認められる。断面形をみると、深さ約1mの西側が垂直に近く、東側がやや緩やかな傾斜を持った台形で、箱塚と片葉研掘を折衷したような形態である。また、これと直交するような形で、墳丘南東側の等高線も直線的に走っているため、墳丘の東から南にかけては、塚ノ山城を築いた際に地形の改変を受けている。
(鐵)

2) 遺物

経塚: SX01 (第16図: 写真図版6・7)

経塚は盗掘を受けており、土師器製経筒、土師器綱、須恵器捏鉢の破片が埋土から出土している。土師器製経筒は少なくとも2個体は存在するようである。

13~16は土師器製経筒である。13・14は胎土や体部外面の状況から同一個体の可能性が高い。接点がなく、どちらの個体も器形にひずみが大きいため復元も困難である。口縁端部にはやや内傾する面をもっている。体部外面には縱方向の細かいひび割れがほぼ全面に見られ、体部内面は平滑にナデが施されているようである。口縁部内面に粘土紐の接合痕、体部外面下端に体部と底部の接合痕が認められる。底部は不調整である。胎土は精良で、砂粒をほとんど含んでいない。16は13・14とはほぼ同じ胎土・調整であるが、器表が非常に荒れている。底部には板状压痕が認められる。13・14と同一個体の可能性もある。15は口縁端部にやや内傾する面をもっている。体部外面は比較的丁寧にナデが施されているが、体部内面は粘土紐の接合痕が顕著である。胎土に赤色砂粒を含み、13・14・16とは明らか



第15図 経塚(SX01)平面・断面図

に異なる。どの個体もひずみが大きく、正確な大きさは測りがたいが、直径は約12cm程度と考えられる。

17は土師器鍋である。体部の破片で、体部外面に平行タタキが施されている。19よりタタキの原体は細かい。内外面ともススやコゲの痕跡は認められない。

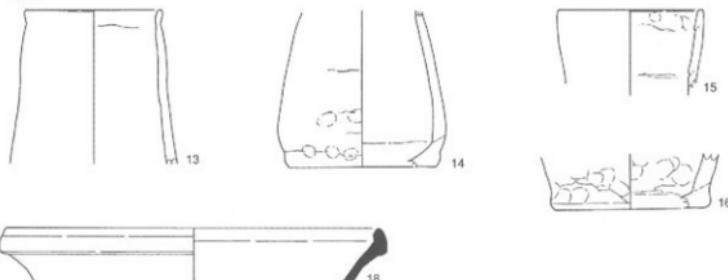
18は須恵器捏鉢である。口縁端部は大きく肥厚している。胎上は粗く、白色砂粒を多く含んでいる。14世紀前半～中頃のものである。

包含層（第16図：写真図版6・7）

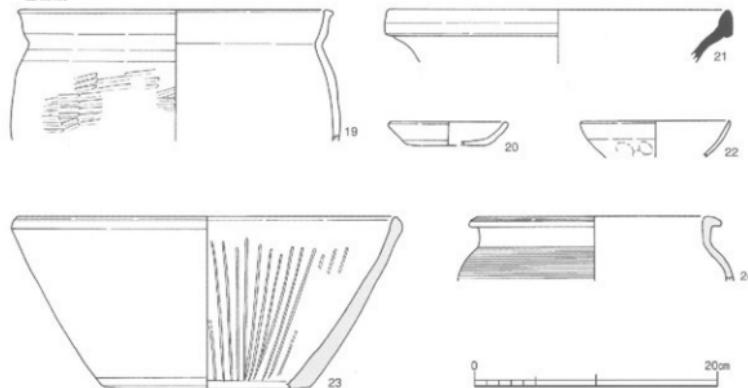
古墳周囲の包含層から土師器鍋・皿、須恵器捏鉢、瓦器碗、丹波焼搖鉢・甕が出土している。

19は土師器鍋である。口縁部端部に面をもち、内外面にやや肥厚している。体部外面には平行タタキ、体部内面にはナデが施されている。内外面ともススやコゲの痕跡は認められない。長谷川編年IV期で、14世紀のものである¹⁰⁾。

SX01



包含層



第16図 中世以降の土器・陶器

20は土師器Ⅲである。手づくね成形である。底部は平坦で、口縁部は短く厚い。

21は須恵器捏鉢である。口縁端部は大きく肥厚している。胎土は粗く、白色砂粒を多く含んでいる。
14世紀前半～中頃のものである。

22は瓦器純である。口縁部内外面はヨコナデが施され、体部外面には指痕が認められる。摩滅のため内面に暗文は確認できず、あっても非常にまばらであろう。口径は12.0cmと小さい。初田館の瓦器Bc類(13世紀中葉以降)よりもやや新しいと考えられる⁽¹⁾。

23は丹波焼擂鉢である。体部内外面とも回転ナデが施され、底部際の外面のみヘラケズリが施されている。擂目は1本引きで、比較的密に入れられている。擂口の摩耗はほとんど認められない。長谷川編年VI期で15世紀後半のものである⁽²⁾。

24は丹波焼臺である。頭部は短く立ち上がり、口縁部は断面三角形で、罐部上面に四線が入れられている。体部外面にはカキ目状の条線が廻らされている。内外面とも褐色が施されているが、口縁端部のみ露胎である。長谷川分類IV A2a類で17世紀後葉～18世紀前半のものである⁽³⁾。

(池田征弘)

【脚注】

- (1) 尾上元規「古墳時代鉄器の地域性－長柄式鉄鎌出現以降の西日本を中心として－」『考古学研究』第40巻第1号（1993）
- (2) 田辺正二『須恵器大成』（1981） 角川書店
- (3) 大阪府立近つ飛鳥博物館『年代のものさし－飛鳥の須恵器－』（2006）
- (4) 伊藤玄三『古鏡文』（1984） ニュー・サイエンス社
- (5) 杉山秀宏「古墳時代の鉄鎌について」『樋原考古学研究所論集 第八』（1988）
- (6) 長谷川真「播磨における土製蓋沸具の様相」『中近世土器の基礎研究XXI』（2007）
- (7) 山田清朝「平安時代～鎌倉時代の土器について」『初田館跡』（1996） 兵庫県教育委員会
- (8) 長谷川真「丹波」「全国シンポジウム中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」（2005）
- (9) 長谷川真「丹波」「江戸時代のやきもの－生産と流通」（2006）

遺物 番号	出土遺構 番号	出土層位	種類	器種	法 番(cm)		色調	現存状況	備考
					口径	底高			
1	S101	盛土	調文土器	深杯	(29.9)	(6.8)	2.5/4/1	2.5/4/1	口縁部1/6 大井溝～口縁 部1/6
2	横丘南半	盛土	須恵器	片壺	(9.9)	(3.3)	N6/0~5/0	N6/0~5/0	口縁部に波状突起。 口縁部1/6
3	S101	盛土	須恵器	壺蓋	(11.1)	(4.5)	N6/	N6/	口縁部1/6 井部1/4
4	横丘南半	盛土	須恵器	壺蓋	(11.8)	4.3	7.5/6/1	7.5/6/1	「口縁部」9、天 井部1/4
5	西側斜面	表土	須恵器	壺身	(12.0)	(3.4)	N4/0	N4/0	口縁部1/8
6	東側斜面	表土	須恵器	壺身	(11.3)	(4.9)	5/7/1	5/7/1	体部1/5
7	横丘南半	盛土	須恵器	壺身	(14.8)	(3.7)	10/6/1~9/4/0	10/6/1~9/4/0	体部1/6
8	西側斜面	表土	須恵器	壺身	(17.4)	(2.2)	2.5/7/1	2.5/7/1	焼成不良 口縁部1/8
9	横丘南半・北側	盛土・表土	須恵器	壺?	(9.2)	(6.7)	胸部縫(10.8)5/1/1	5/1/1	口縁部は洗刷で区 別されたが、波状文帯に 繋がる波状文 縫かい波状文 表面にスリップ。
10	東側斜面	表土	須恵器	壺?	(17.4)	(5.0)	7.5/7/6	7.5/7/6	「口縁部」1/12
11	横丘南半	盛土	土師器	瓦	(10.0)	(12.75)	5/8R6/8	5/8R6/8	体部1/3 胸部縫(12.0)5/8R7/4
12	横丘南半	盛土	土師器	瓦	(11.5)	(12.9)	6/2/0	6/2/0	「口縁部」1/8 表面～体部
13	S101	盛土	土師器	絆陶	(11.5)	(7.1)	7.5/8/7/4	7.5/8/7/4	体部1/12、底部 「口縫部」～体部
14	S101	盛土	土師器	絆陶	(11.5)	(4.6)	(12.5)7.5/8/7/4	7.5/8/7/4	「口縫部」～体部 底部1/4
15	S101	盛土	土師器	絆陶	(11.5)	(4.8)	7.5/8/6/4	7.5/8/6/4	「口縫部」1/4 底部1/4
16	S101	盛土	土師器	絆陶	(10.8)	(4.8)	7.5/8/7/6	7.5/8/7/6	「口縫部」1/4 底部1/4 写真のみ。
17	横丘南半	盛土	土師器	錐	(25.9)	(10.8)	N6/	N6/	「口縫部」1/16
18	S101	盛土	土師器	錐	(9.3)	(2.0)	7.5/8R7/6	7.5/8/7/6	「口縫部」1/16
19	横丘南半	盛土	土師器	錐	(27.2)	(4.3)	7.5/8/7/4	7.5/8/7/4	全体1/3
20	横丘南半	中世盛土	須恵器	瓦器	(12.0)	(3.0)	2.5/6/1	2.5/6/1	「口縫部」1/12
21				瓦器	(31.2)	(14.3)	N3/0	N3/0	1/6
22	横丘南半	盛土	包含層	錐	(18.5)	(5.3)	5/15/3	5/15/3	「口縫部」1/4
23	横丘西側	表土	丹波焼	壺	(18.5)	(2.5)	2.5/4/2	2.5/4/2	現存部分については 全前に焼焦。
24	西側斜面	表土	丹波焼	壺					

遺物 番号	出土遺構 番号	出土層位	種類	器種	法 番		重量	残存状況	備考
					長さ	幅			
S1 主体部分	盛土	打鑿石器	スクレーパー		73.3mm	33.9mm	9.0mm	26.0kg (13kg光形)	サヌカイト

第2表 出土遺物一覧表

大刀・刀子類

() は現存値：単位はcm

報告番号	種別	全長	長さ(刃部)	幅(刃部)	長さ(柄部)	幅(柄部)	備考
M1	大刀	87.4	70.4	2.6~2.8	17.0	2.5	鹿角装
M2	大刀	99.5	81.1	3.6	18.4	2.3	
M3	刀子	15.1	6.8	1.6	5.2	2.2	鹿角装
M4	刀子	(10.8)	(6.4)	1.95	(4.5)	1.95	鹿角装
M5	刀子	(18.05)	(12.0)	2.05	(5.5)	2.3	布付着

鉄鎌

() は現存値：単位はcm

報告番号	種別	全長	全長	長さ(鎌身部)	長さ(頭部)	長さ(茎部)	備考
M6	鉄鎌	有茎平根・脇抜梅葉式	(5.0)	(4.6)	(1.5)		V2周辺出土
M7	鉄鎌	長頸脇抜梅葉式	(7.6)	3.0	(4.9)		V2周辺出土
M8	鉄鎌	長頸脇抜梅葉式	12.85	2.35	8.3	2.4	M2周辺出土
M9	鉄鎌	長頸脇抜梅葉式	(13.6)	3.0	8.3	(2.7)	M2周辺出土
M10	鉄鎌	長頸片刃箭式	(11.1)	(2.3)	8.8	(0.7)	M2周辺出土
M11	鉄鎌	長頸片刃箭式	(10.3)	(2.4)	7.3	(0.9)	
M12	鉄鎌	長頸片刃箭式	(9.1)	2.8	(6.4)		
M13	鉄鎌	長頸片刃箭式	(5.25)	2.75	(2.7)		
M14	鉄鎌	長頸片刃箭式	(8.0)	(3.06)	(5.3)		
M15	鉄鎌	長頸片刃箭式	(7.35)	2.9	(4.8)		
M16	鉄鎌	長頸片刃箭式	(8.65)	2.9	(6.1)		
M17	鉄鎌	長頸片刃箭式	(8.7)	3.5	(5.5)		
M18	鉄鎌	長頸片刃箭式	(7.5)	2.8	(5.0)		
M19	鉄鎌	長頸片刃箭式	(7.4)	2.9	(4.5)		
M20	鉄鎌	長頸片刃箭式	(5.3)	3.1	(2.7)		
M21	鉄鎌	長頸片刃箭式	(11.0)	2.8	8.3	(0.15)	
M22	鉄鎌	長頸片刃箭式	(11.2)	2.85	7.75	(0.6)	
M23	鉄鎌	長頸片刃箭式	(10.65)	2.2	8.1	(0.6)	
M24	鉄鎌	長頸片刃箭式	(11.25)	2.8	7.95	(0.45)	
M25	鉄鎌	長頸片刃箭式	(11.9)	2.3	8.6	(1.5)	
M26	鉄鎌	長頸片刃箭式	(11.8)	2.7	8.4	(1.1)	
M27	鉄鎌	長頸片刃箭式	(12.85)	(2.8)	8.7	(2.2)	
M28	鉄鎌	長頸片刃箭式	(12.3)	3.1	8.9	(1.2)	
M29	鉄鎌	長頸片刃箭式	13.55	(2.45)	8.1	(3.0)	
M30	鉄鎌	長頸片刃箭式	(13.1)	2.65	7.9	2.6	
M31	鉄鎌	長頸片刃箭式	(13.9)	2.95	8.45	(3.0)	
M32	鉄鎌	長頸片刃箭式	(12.4)	(2.3)	8.2	(2.1)	
M33	鉄鎌	長頸片刃箭式	(12.05)	(2.8)	7.9	(1.7)	
M34	鉄鎌	長頸片刃箭式	(12.5)	2.5	8.8	(1.4)	
M35	鉄鎌	長頸片刃箭式	(12.6)	(2.9)	8.2	(1.7)	
M36	鉄鎌	長頸片刃箭式	(12.9)	2.8	8.35	(1.9)	
M37	鉄鎌	長頸片刃箭式	(13.9)	3.0	8.1	3.0	
M38	鉄鎌	長頸片刃箭式	(12.7)	3.0	8.3	(1.5)	
M39	鉄鎌	長頸片刃箭式	(12.2)	2.7	8.2	(1.6)	
M40	鉄鎌	長頸片刃箭式	(13.9)	2.6	8.9	(2.7)	
M41	鉄鎌	長頸片刃箭式	(13.7)	2.7	8.4	(2.7)	
M42	鉄鎌	長頸片刃箭式	13.3	2.85	7.8	2.8	
M43	鉄鎌	長頸片刃箭式	(15.4)	3.7	7.7	(4.6)	
M44	鉄鎌	長頸片刃箭式	15.4	2.85	7.8	4.9	
M45	鉄鎌	長頸片刃箭式	15.6	3.05	8.05	4.7	
M46	鉄鎌	長頸片刃箭式	(16.1)	(2.7)	8.7	5.1	
M47	鉄鎌	長頸片刃箭式	14.5	2.6	8.0	3.9	
M48	鉄鎌	長頸片刃箭式	15.95	3.1	7.9	5.1	
M49	鉄鎌	長頸片刃箭式	15.2	(2.5)	8.55	4.3	
M50	鉄鎌	長頸片刃箭式	(11.8)	2.4	8.5	(1.1)	2本融着
M51	鉄鎌	長頸片刃箭式	16.3	3.1	7.9	5.3	
M52	鉄鎌	長頸片刃箭式	(11.7)	3.2	8.0	(0.8)	
M53	鉄鎌	長頸片刃箭式	16.25	3.0	8.3	5.3	3本融着
M54	鉄鎌	長頸片刃箭式	(13.8)	(2.5)	8.4	3.5	

第3表 出土鉄器一覧表

第4章　まとめ

今回の調査では、古墳時代後期初頭の木棺直葬墳と明智光秀による八上城攻略の際に塗かれたとされる陣城・塚ノ山城跡の一部を調査するとともに、縄文時代の土坑と破壊された経緯を確認することができた。ここでは塚ノ山1号墳の特徴と塚ノ山経塚について、まとめてみたい。

塚ノ山1号墳

本墳の特徴は、副葬品が鉄製武器に偏っており、墳丘や埋葬主体の規模からみると質・量の両面で、多いことにあると考える。この点を含め、以下で少し検討してみたい。

最初に本墳の築造時期について考えてみる。墳丘周辺から出土している須恵器については、第3章でも触れたように6世紀前葉を中心とした時期のものと考えられる。しかし、出土状況の点でやや明確さを欠く点がある事から、確実に副葬品と考えられる鉄製武器類のうち、大刀と鉄鎌の形態からも築造時期を推測してみたい。

大刀については、いずれも外装が鹿角装である。柄頭・鞘尻部分の外装は残っていないものの、M1は柄縁と鞘口、M2は柄縁のごく一部に鹿角装が残っていた。特にM1の柄縁部には明瞭な直弧文が認められ、表現も形骸化しておらず、5世紀的な様相を示していると考えられる¹⁰⁰。また、柄部にみられる巻き紐は2束の繊維をさらに別の繊維でくるむという構成であり、この手法を用いた巻き紐は朝來市向山古墳群・市条寺古墳群の出土刀剣で注目され、県下では5世紀末から6世紀初頭といった時期の古墳から出土している¹⁰¹。

鉄鎌のうち、形態変化が捉えやすい長頸・片刃箭式鎌についてみると、鍔身関部の形態が銛頭で道刺をなしている資料で占められており、長頸・片刃箭式鎌でも出現期のものに位置付けられる。また、有茎平根・腸抉柳葉式鎌、長頸・腸抉柳葉式の形態からみても、尾上氏の編年¹⁰²でいうI期の鉄鎌群と考えていいだろう。そして、I期の時期であるが、開始期が5世紀前半で、2期との境がMT15型式並行期、曆半代では5世紀末から6世紀初頭とされている。さらに有茎平根・腸抉柳葉式鎌については、豊島直博氏による分類と編年¹⁰³と照らし合せても、MT15型式段階のものと考えられる。

以上、須恵器、大刀、鉄鎌を検討した結果、当墳の築造時期は6世紀初頭を中心とする時期と捉えてよいと思われる。

次に、本墳に副葬されていた鉄鎌群の内容について少し考えてみたい。これまで述べてきたように副葬されていた鉄鎌は有茎平根式鎌1点と長頸式鎌48点からなり、両者に明確な副葬位置の違いがある点でも、古墳時代中期に成立する副葬鎌のセット関係である「細根系の長頸鎌+平根系の短茎有茎鎌」の流れを汲むものといえる。

また、それだけではなく長頸鎌の中で、腸抉柳葉式と片刃箭式の間にも副葬位置および点数の違いがある。前者は有茎平根・腸抉柳葉式鎌と並べて埋納されており、後者については1点を除いて、片刃箭式鎌だけを束ねた状態で埋納されていた。この出土状況を重視すれば、本墳の築造者は長頸腸抉柳葉式鎌を有茎平根式鎌に見立てていた可能性も考えられる。

また、古墳時代後期に副葬される鉄鎌の内容が地域色を表しているという尾上氏の指摘がある¹⁰⁴。それによると兵庫県は南部が「畿内地域」にあたり、柳葉式、腸抉柳葉式、片刃箭式の三者がともに分布し、長頸式のみ、あるいは長頸式多數と有茎平根式少數という組み合わせになる。また、北部は「山陰

東半部地域」に含まれ、長頭式は柳葉式と脇抉柳葉式が分布し、有茎平根式のあり方では畿内地域と共通するとされる。この地域分類からすれば、当墳は長頭柳葉式鎌を欠くものの、長頭式鎌の形式構成と有茎平根式鎌との組み合わせ方の両面で、「畿内地域」の特徴を備えている。

次に篠山盆地の中での当墳の意義についても、少し触れてみたい。これまでのところ、篠山盆地で武具が副葬された古墳の調査例は極めて限られており、当墳の地域において比較できる対象はほんんどない。しかし、中期から後期にかけての古墳で鉄製品の出土が伝えられている例および、少ない発掘調査例との比較を行ってみたい。

鉄製武器の出土が伝えられる古墳には次のようなものがある。5世紀半ばの築造とされる一辺55mの方墳である北条古墳は粘土被から鉄劍あるいは鉄槍の出土が伝えられている。全長143mの前方後円墳である雲部車塚古墳には甲冑、刀剣類、鐵鎌が多量に副葬されており、鐵鎌に関しては100点以上あったことがわかっている。曾地・宝地山古墳群のうち、全長32mの前方後円墳である宝地山5号墳は木棺直葬で、直刀2振、須恵器の出土が伝えられ、14基あるこの古墳群においては前方後円墳である1号墳、七鈴鏡を副葬していた2号墳とともに上位に位置するものと考えられる。単独の円墳と考えられる直径約13mの堂山古墳からは、直刀、鎌、鐵鎌、須恵器等の出土が伝えられているが、主体部の形式は不明である。清水1号墳は円墳で墳丘規模は不明である。横穴式石室は全壊し、直刀、須恵器の出土が伝えられる。屋中3号墳は削平されたため墳丘規模・主体部が不明であるが、直刀3振以上、鉤、馬具の出土が伝えられている。直径10mの円墳である山田山1号墳からは須恵器多数と刀剣の出土が伝えられる。

調査が行われた古墳としては、丹波南町城の西山北古墳、真南条上3号墳があげられる。両墳とも当墳とはほぼ同時期であり、西山北古墳は直径10m弱の円墳で主体部が2基確認されている。鐵鎌7点と鹿角装刀子が2点出土しており、鐵鎌は残りが悪いが長頭式鎌が有茎平根式鎌に比べて少ない。真南条上3号墳は複数の主体部を持つ木棺直葬で鐵鎌、刀子、鎌、斧、鎌、玉類が副葬されていた。鐵鎌は3基の主体部から合計38点出土しており、長頭式鎌は24点である。

先にも触れた豊島氏は古墳時代後期の奈良盆地を対象に副葬された鐵鎌による階層性の分析を行い、単独首長墳と群集墳の副葬鎌には量・質・種類の点で明確な差があることを指摘している⁶⁾。それによると首長墳とされる古墳から出土する鐵鎌は点数が100点以上となるとともに、平根式鎌をほとんど含まず、長頭式鎌に特殊な形態のものを含む傾向が認められるのに対し、群集墳の場合は群中の盟主墳でも出土点数は20点前後であり、かつ平根式鎌の割合が高い。これを篠山盆地に敷衍してみると、首長墓については例がないため比較できないが、西山北古墳と真南条上3号墳については奈良盆地の例とよく合致すると思われる。ただし、塚ノ山1号墳の場合は、特殊な形式の長頭式鎌はないものの、數と内容の点で群集墳における副葬鎌のあり方とはかけ離れ、首長墓のあり方に近いものがある。かつて新納泉氏は古墳時代後期の兵制を装飾付大刀の副葬という視点で整理し、首長墳と群集墳の関係性を分析した⁷⁾。その中で群集墳の被葬者を四つのグループに分類し、その頂点に立つ有力農民を被葬者とする群集墳には装飾付大刀と鐵鎌等の武器が副葬されたとした。もちろん、新納氏が指摘した群集墳における武器の階層性は、本墳よりも新しい時期の様相を対象としたものではあるが、鹿角装大刀を持ち、大量の鐵鎌を副葬するという本墳の状況は、首長墓の造営が衰退を始めるに伴い、台頭してきた地方の有力農民の姿を反映したものである可能性が高いと考えられる。

(續)

【脚注】

- (1) 大阪府立近つ飛鳥博物館『金の大刀と銀の大刀－古墳・飛鳥の貴人と陪屬－』(1996)
- (2) 兵庫県教育委員会『向山古墳群・市条古墳群・一乗寺経塚・矢別遺跡』(1999)
- (3) 尾上元規「古墳時代鉄器の地域性－長柄式鉄鎌出現以降の西日本を中心として－」
『考古学研究』第40巻第1号 (1993)
- (4) 豊島宣博「後期古墳出土鉄器の地域性と陪屬性」『文化財論集Ⅲ』(2002)
- (5) 杉山秀宏「古墳時代の鉄器について」『福原考古学研究所論集 第八』(1968)
- (6) 前掲、(3)と同じ
- (7) 前掲、(4)と同じ
- (8) 新納泉「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30巻第3号 (1983)

【参考文献】

- 多紀郡教育事務組合教育委員会『西山北古墳調査報告書』(1972)
篠山町教育委員会『篠山町内遺跡詳細分布調査報告書』(1989)
西紀・丹南町教育委員会『丹南町内遺跡分布図』(1993)
兵庫県史編集専門委員会『兵庫県史 考古資料編』(1992)
丹南町史編纂委員会『丹南町史（上巻）』(1994)

経塚（SX01）について

塚ノ山1号墳造営の後、その墳丘上には経塚、中世墓が造られ、さらにその後、塚ノ山1号墳を含めた周囲が砦に利用されたと考えられる。ただし、経塚、中世墓については砦の造営時に削半され、盜掘された経塚の埋納坑と考えられる土坑（SX01）から、若干の遺物が出土したのみである。

経塚に関する遺物は土師器製経筒のみである。篠山市内では7箇所で経塚の存在が確認されている（第4表）が、口径12cm前後の経筒は上板井経塚、西山北古墳経塚で出土しており、いずれも土師器製である。上板井経塚出土例は内面にワラ状压痕が付着していることから壓に粘土紐を巻き付けて造られたと考えられ、外面には縦方向のヒビ割れが認められる。塚ノ山出土例（13・14）も外面に縦方向のヒビ割れが顕著であることから同様の方法で作られた可能性があり、精良な胎土の質感も上板井経塚例と共通している。時期的には上板井経塚と同じ頃の12世紀末～13世紀初頭頃の可能性が高い。

経塚に関する遺構については盜掘された土坑（SX01）のみで、坑内に残存していた石材はごくわずかであった。市内の他の経塚を含めて、ほとんどの経塚で石室の存在が想定されていることから、石室が存在した可能性は否めない。

経塚造営以降については土師器鍋、須恵器捏鉢、丹波焼捏鉢、瓦器碗など14～15世紀の遺物が出土している。土師器鍋や丹波焼捏鉢は使用されておらず、藏骨器であった可能性が高く、中世墓が存在した可能性が高いものと思われる。

（池田）

第4表 篠山市内の経塚

名称	所在地	立地	造形	遺物	備考	所蔵者及び保管者	文献
塚ノ山経塚	篠山市野間	丘陵 塚ノ山 1号墳上	土坑	土師器製経筒、土師器鉢、須恵器捏鉢	平成9年度 発掘調査	兵庫県立 考古博物館	本書
平石山経塚	篠山市火打 岩字平石谷 47-1	丘陵 坊教寺裏	石室	瓦質土器製経筒、瓦質土器 製経筒蓋、須恵器壺、瓦器皿、丹波焼破片、草花双鳥 鏡	大正9年 発見	東京国立 博物館	1
上板井経塚	篠山市上板井 字興法寺 古墳上	丘陵 上板井 古墳上	石室	土師器製経筒、須恵器製 外筒、青白磁合子、須恵器 小壺、土師器杯、土師器 鍋、網双鳥鏡、刀子、鉄釘、 山吹蝶、鳥文鏡、草花流水 双鳥文鏡、錢貨（開元通 宝、宋通元宝、太平通宝、 明道元宝、皇宋通宝、？寧 元宝、元宝通宝、不明）	昭和58年 発掘調査	兵庫県立 考古博物館	2
西山北古墳 経塚	篠山市 西古佐	丘陵 西山北 古墳上	石室？	土師器製経筒、土師器製 経筒蓋、瓦器皿、錢貨（開 元通宝2、淳化元宝3、景德 元宝、景祐元宝、熙寧重 宝、元豐通宝、元祐通宝、 嘉定通宝、不明）	昭和46年 発掘調査	篠山市 教育委員会	3
諏訪腰経塚	篠山市味間 奥字諏訪腰	丘陵	石室？	鉄製経筒、壺、山吹蝶文鏡		諏訪神社、 個人	4
小野原住吉 経塚	篠山市 今田町 上小野原	丘陵 住吉神社 本殿裏	石室？	須恵器製経筒、須恵器壺、 須恵器捏鉢、土師器皿、丹 波燒壺、刀子	昭和51年 発見	個人	5
上小野原 経塚	篠山市 今田町 上小野原	丘陵	不明	土師器製経筒		兵庫県立 篠山鳳鳴 高校	6

- 1 福原洪次郎『多紀郷土史話』(1934)、奥田楽々斎『多紀郷上史考』上巻(1958)、東京国立博物館所蔵品の実見にあっては今井 敦・酒井元樹氏の協力を得た。
- 2 兵庫県教育委員会『上板井古墳群』(1986)
- 3 多紀郡教育事務組合教育委員会『西山北古墳調査報告書』(1972)
- 4 多紀郡教育事務組合教育委員会『西山北古墳調査報告書』(1972)、「丹南町史」(1998)
- 5 兵庫県立歴史博物館「特別展観いかなえたまえ－古代人の祝術と信仰－」(1990)、中野卓郎氏にご教示いただいた。
- 6 杉本捷雄「小野原焼余談」「茶わん」第9巻第10号(1939)、杉本捷雄「改訂丹波の古窯」(1969)、森内秀造「兵庫の経塚」(1992)

報告書抄録

ふりがな	つかのやまいちごうふん							
書名	塚ノ山1号墳							
副書名	篠山丹波線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第355冊							
編著者名	鐵 英記・池田征弘							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中500 Tel. 079-437-5589							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 Tel. 078-341-7711							
発行年月日	2009年(平成21年)3月20日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つかのやま 塚ノ山1号墳	ささやま 篠山市	28221	820414	35度 4分 23秒	135度 14分 50秒	確認調査(960298) 19961016	8m ² 482m ²	丹波篠山線 緊急地方道路整備 事業に伴う 事前調査
つかのやまじょうあと 塚ノ山城跡	のま 野間字 ひがし 東山					本発掘調査(97034) 19971014～ 19971202		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
つかのやま 塚ノ山1号墳	集落	縄文時代	土坑	土器・石器				
	古墳	古墳時代 後期	木棺直葬墳	七箇器・須恵器・鉄器		大刀、刀子に鹿角装、 鉄鎌50以上		
	信仰施設	中世前期	経塚	土器・須恵器				
城跡	近世初頭	堀切						
要約	県道整備に伴う記録保存調査。6世紀初頭の木棺直葬墳1基とその上に営まれた経塚跡、および占墳を利用して構築された付城跡を調査した。木棺直葬墳には鉄製武器類が多数(大刀2・刀子3・鉄鎌約50)副葬されていた。中世前期の経塚は盜掘されていたが、土製経筒の破片が検出された。城跡は堀切を確認した。なお、墳丘の下層で縄文時代後期の土坑も1基検出した。							

写 真 図 版

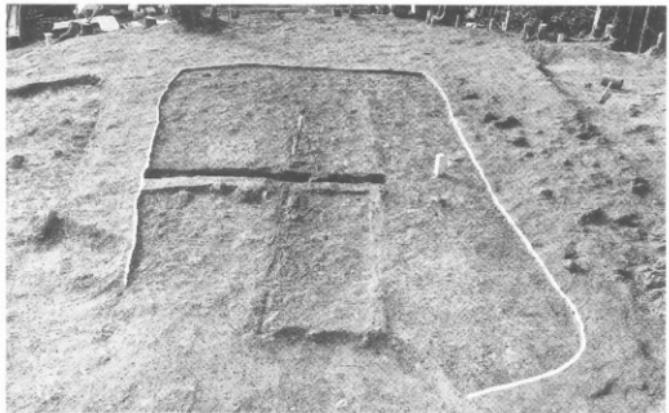




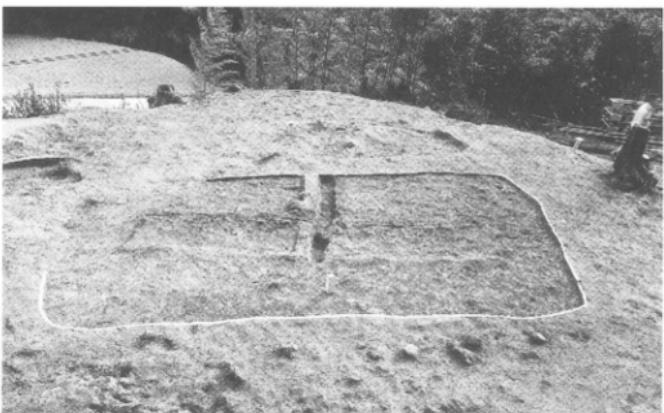
墳丘遠景
(東上空から撮影日:
平成 9 年11月20日)



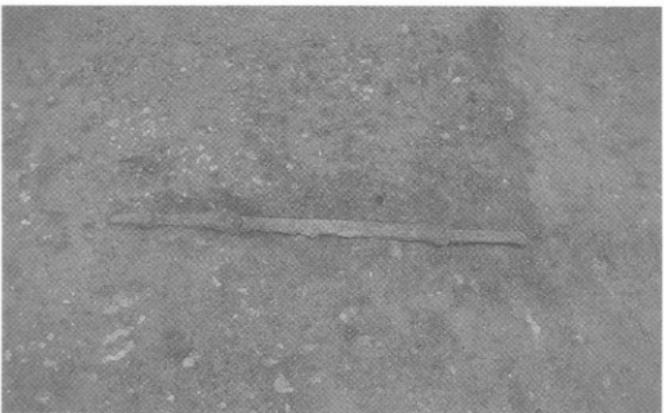
墳丘全景
(西から)



主体部全景
(東から)



主体部全景
(北から)

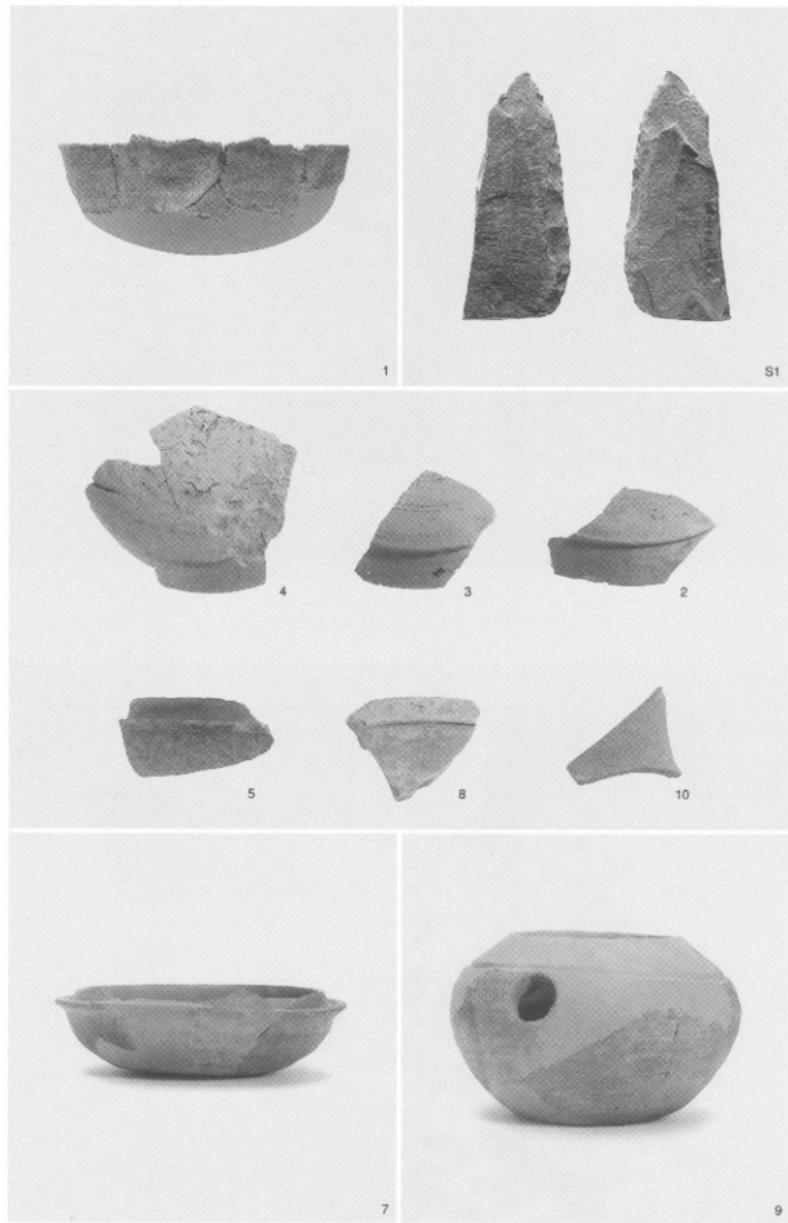


大刀(M1)出土状況
(南から)

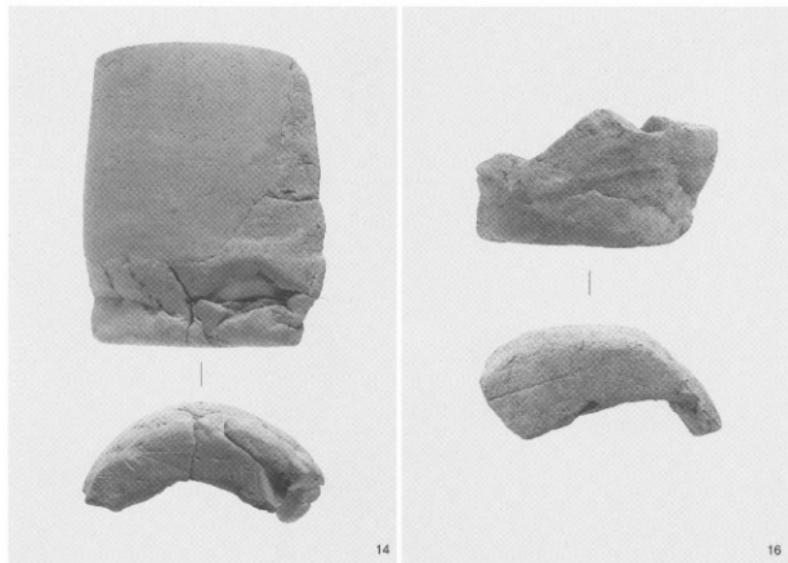
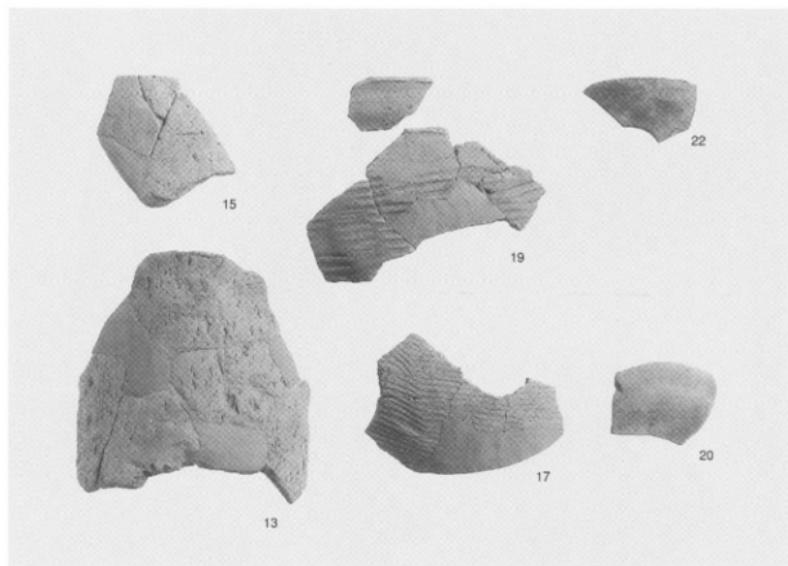


大刀(M2)出土状況
(南から)

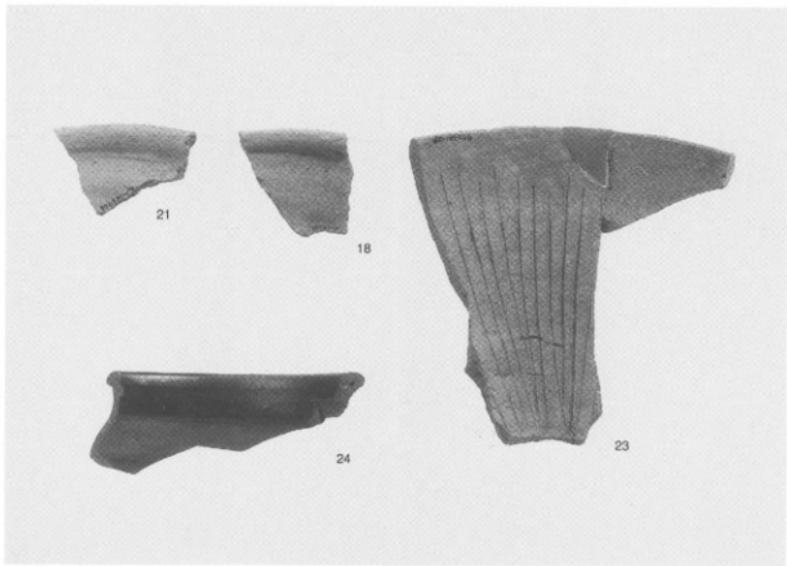
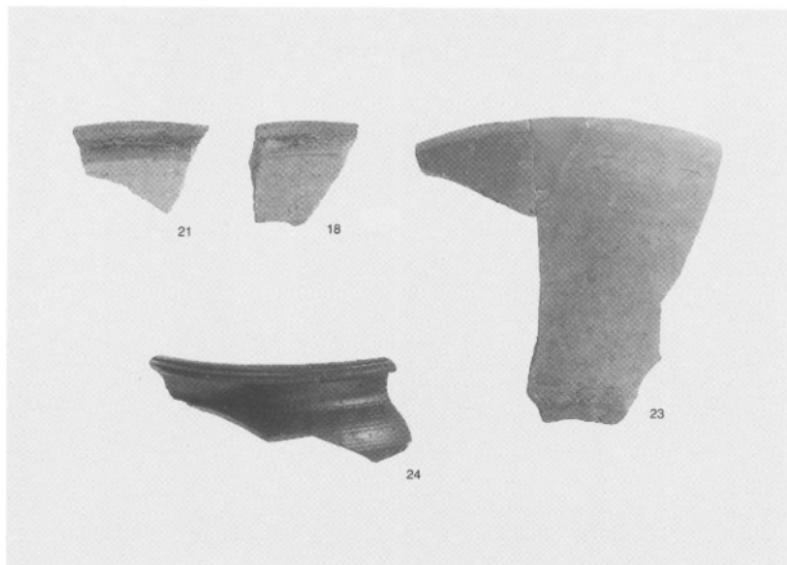




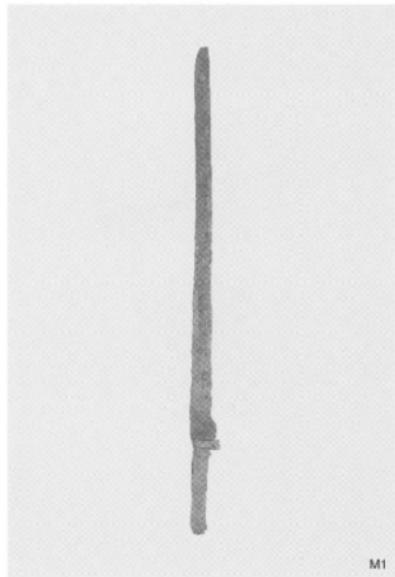
出土遺物（縄文土器・石器・須恵器）



出土遺物（土師器）



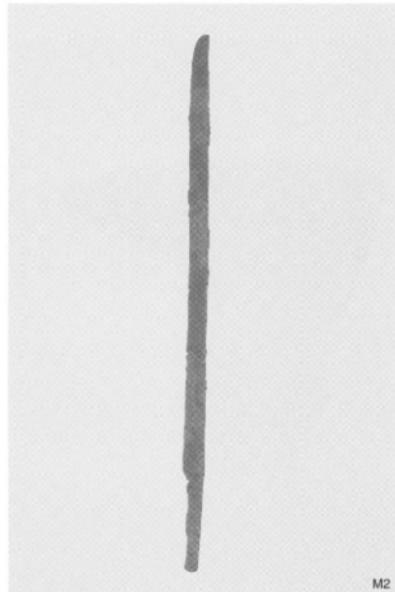
出土遺物（須恵器・陶器）



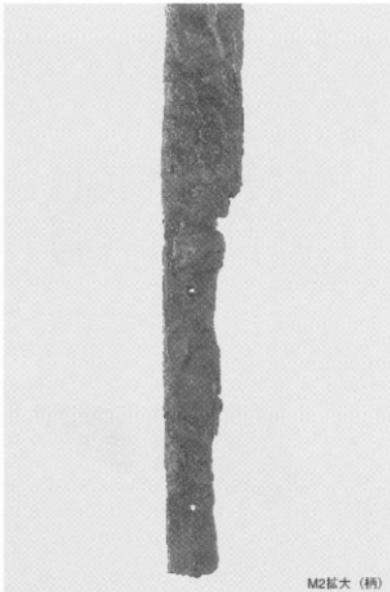
M1



M1拡大 (柄)

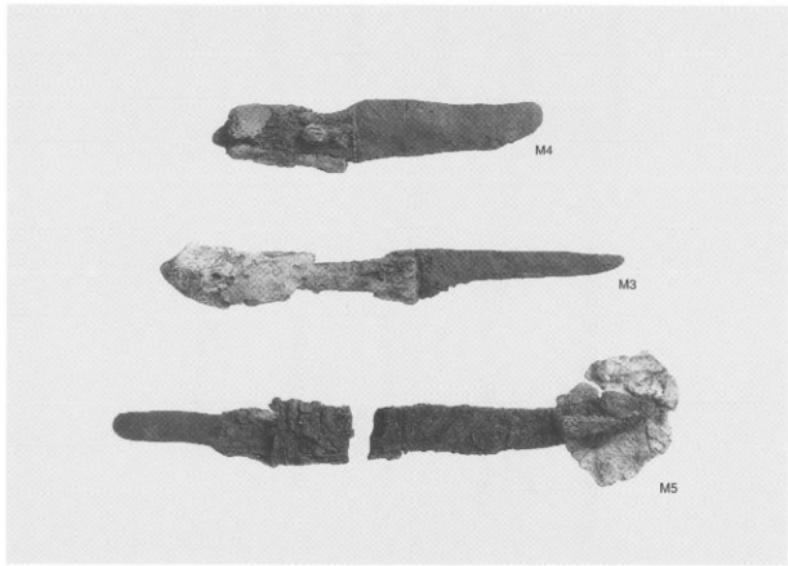
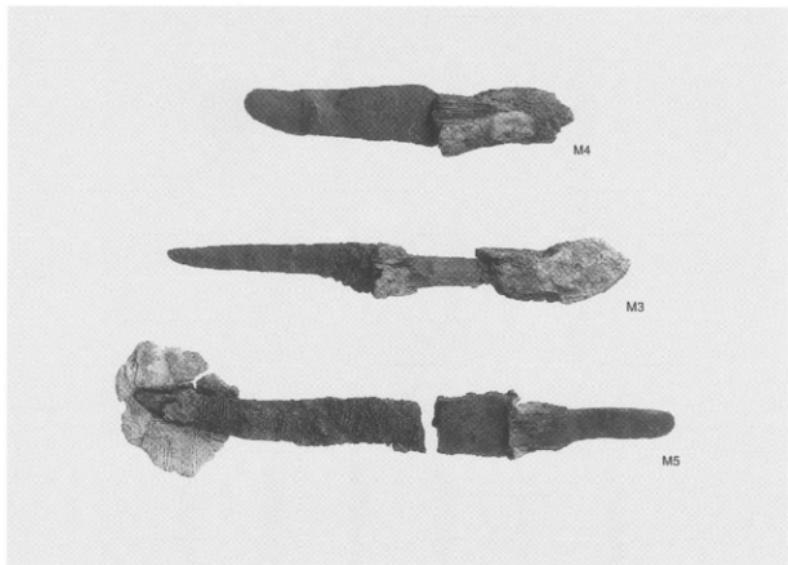


M2

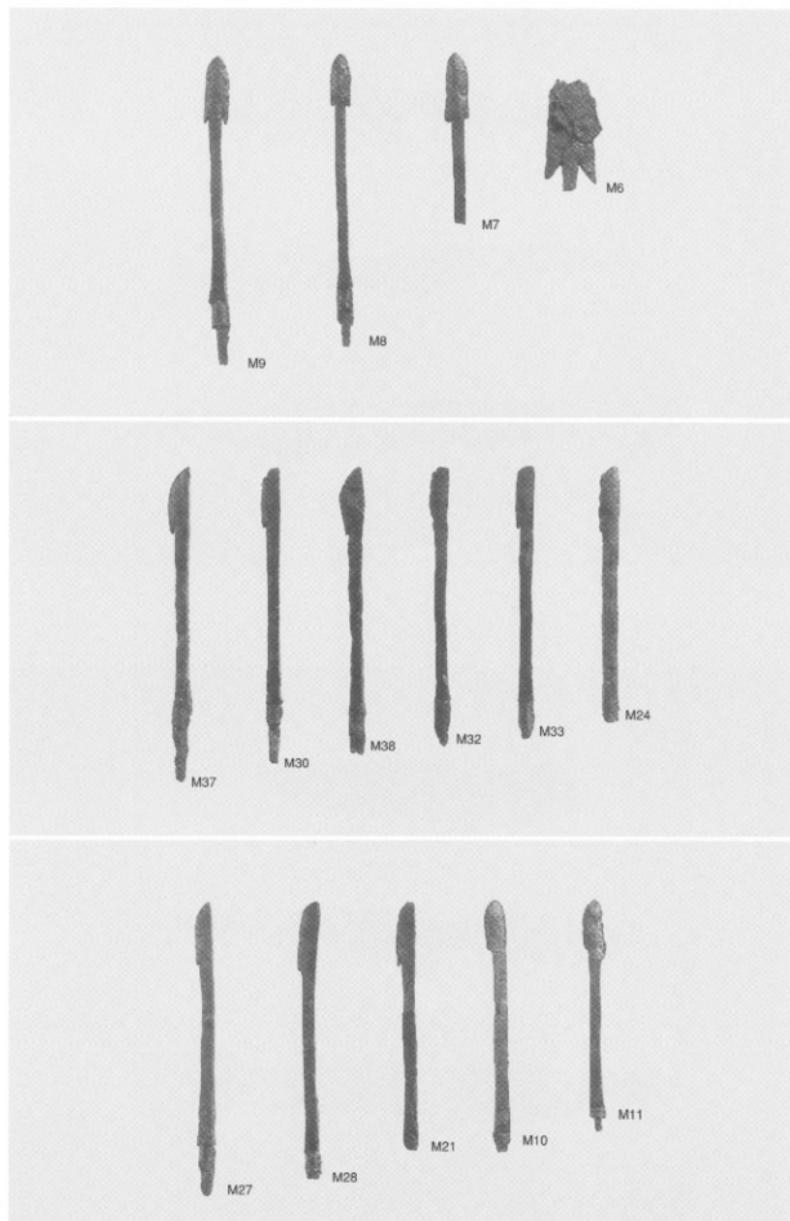


M2拡大 (柄)

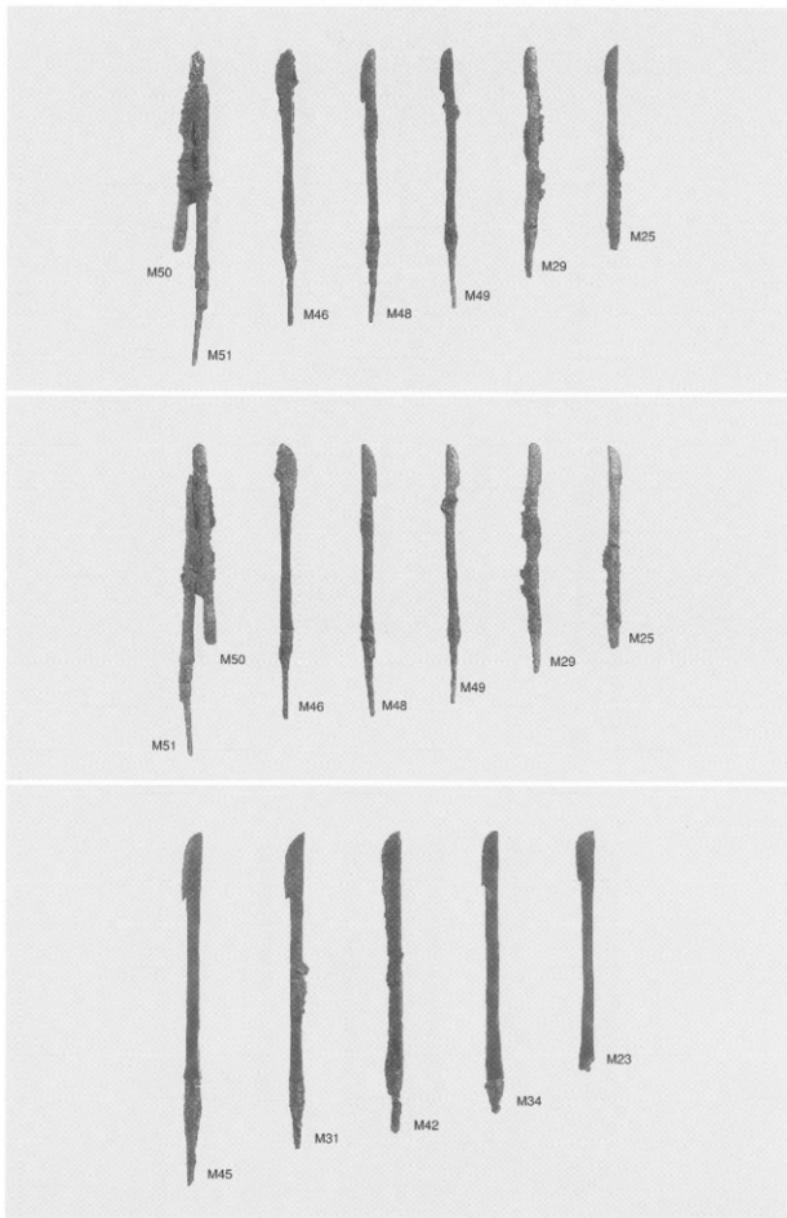
出土遺物（大刀）



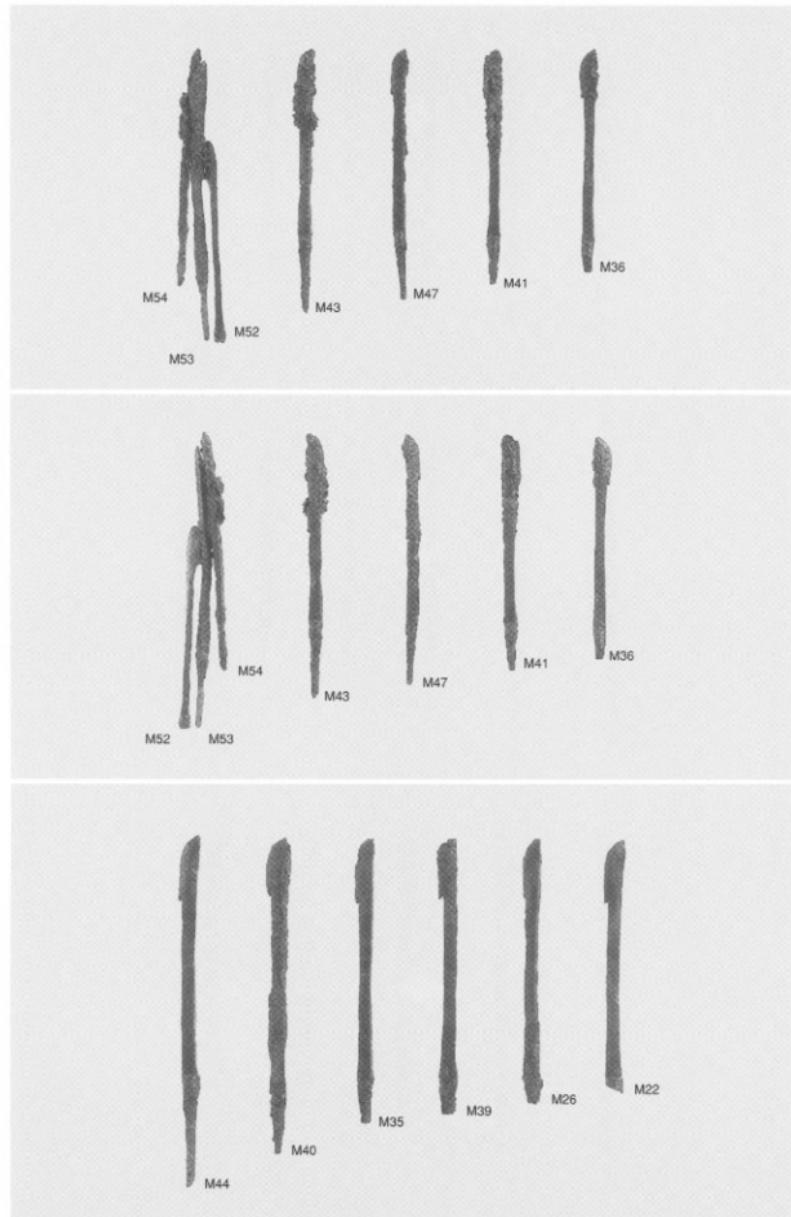
出土遺物（刀子）



出土遺物（鉄錠 1）



出土遺物（鉄鎌 2）



出土遺物（鉄鎖 3）

兵庫県文化財調査報告 第355冊

塚ノ山1号墳

篠山丹波線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書

平成21(2009)年3月31日

編集 兵庫県立考古博物館

〒675-0142 加古郡播磨町大中500

Tel 079-437-5589

発行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 富士高速印刷株式会社

〒679-4232 姫路市林田町上伊勢962-3
